

【研究ノート】

カレツキはケインズに対する先行性の主張の封印をなぜ解いたのか

Why did Kalecki Unseal the Claim to Priority over Keynes?

山本 英司
YAMAMOTO Eiji

<目 次>

- I. はじめに
- II. 『経済変動理論論文集』における先行性の主張
 - (1) ケインズは『経済変動理論論文集』の序文を書くことになっていたのか
 - (2) 『経済変動理論論文集』における「既に事情に通じた読者でなければ意味をなさない」先行性の主張
 - (3) カレツキの先行性は理解されたのか
 - (4) 国立経済社会研究所ケンブリッジ研究計画への就職
 - (5) 小括
- III. 『経済変動理論論文集』以後における先行性の主張
 - (1) ポーランド語版『貨幣賃金と実質賃金』
 - (2) オックスフォード大学統計研究所への移籍と「利潤の理論」及び『経済動学研究』
 - (3) 国際労働機関・国際連合勤務と『経済動学理論』
 - (4) ポーランドへの帰国から『資本主義経済動学論文選集1933-1970』まで
 - (5) 小括
- IV. おわりに

彼がストックホルムにいた時、ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』が現れた。彼はそれを手に入れて彼が書こうと思っていた本を読み始めた。彼が私的な会話で告白したことには、これは居心地の悪い経験であったとのことであったが、彼は公表の先行性に公に言及したことは決してなかった（例外として彼の最初の英語の本の1つの脚注があるが、それは既に事情に通じた読者でなければ意味をなさないものであった）。彼の死の直前に至って初めて、その他の人々が彼の代わりにその主張を公に行ったのは後になって、ようやく彼はこの本の序文にそのことに簡潔に言及したのである。

(Robinson (1971), p. 1)

困難続きの年月を振り返って、カレツキはかつて悲しくも真実の見解を述べた。彼の人生の物語は、暴虐、偏見、そして抑圧に対する抗議の辞職の連続に要約できるであろう、と。

(Feiwel (1975), p. 455)

I. はじめに

本稿は、山本 (2021) の続編にあたり、山本 (2020) とともに三部作をなすものである。

1936年2月に出版されたばかりのケインズの『一般理論』(Keynes (1936)) をストックホルムで読んだカレツキは、同年4月¹の渡英後に公表された書評 (Kalecki (1936a)) において、ポーランド語においてではあるが、『景気循環

¹ 山本 (2009) においては Osiatyński (1997c), pp. 589-590 に基づき「3月」(18頁) と記述していたが、山本 (2021), 111頁においてロックフェラー財団記録 (元木 (2009) に収録) に基づいて記述していた通り、正しくは4月である。この場を借りて改めて訂正を行う。

理論』(Kalecki (1933a)) を引き合いに出しつつ先行性を主張していた。また、カルドアの回顧によると、LSEのセミナーにおいてカレツキは先行性を繰り返し主張していた(Kaldor (1989), pp. 7-8)。さらに、状況証拠に基づく推測に過ぎないが、ロビンソンに見せた「景気循環の理論」(Kalecki (1937a)) の草稿においてカレツキは、書評と同じく先行性を主張していた。

だが、ケインズに対する批判の調子を和らげるように求められたカレツキは、これまた状況証拠に基づく推測に過ぎないが、そこまでは求められていなかったにもかかわらず、公表された「景気循環の理論」において、先行性の主張を丸ごと削除した。また、1937年から1938年にかけての諸論文²においてカレツキは、「ケインズ理論の応用」として本来は自分自身の理論の応用を展開した。以上の経緯を追いつつ、カレツキが先行性の主張を封印した理由を考察したのが山本(2021)であった。

しかしながら、ロビンソン自身も「彼は公表の先行性に公に言及したことは決してなかった(例外として彼の最初の英語の本の1つの脚注があるが、それは既に事情に通じた読者でなければ意味をなさないものであった)」と記しているように、カレツキは先行性の主張の封印を実は解いていた。その理由を考察するのが本稿の目的である。

以下、第Ⅱ節において、「彼の最初の英語の本」であるところの『経済変動理論論文集』(Kalecki (1939a)) におけるカレツキによる先行性の主張内容を確認するとともに、執筆前後の時期におけるカレツキの歩み及び周辺の動向を整理することを通じて、この時期にカレツキがケインズに対する先行性の主張の封印を解いた事情を考察する。第Ⅲ節において、それ以降の時期における先行性の主張について、カレツキ自身によるものと第三者によるものと合わせて整理するとともに³、カレツキの後半生を概観する。最後にまとめを行う。

Ⅱ. 『経済変動理論論文集』における先行性の主張

本節では、『経済変動理論論文集』におけるカレツキによる先行性の主張内容を確認するとともに、執筆前後の時

期におけるカレツキの歩み及び周辺の動向を整理することを通じて、この時期にカレツキがケインズに対する先行性の主張の封印を解いた事情を考察する。

(1) ケインズは『経済変動理論論文集』の序文を書くことになっていたのか

ポーランドの景気循環・物価研究所に在職していたカレツキは、1936年2月6日が第1回支給日となった1年間の助成金をロックフェラー財団から得て在外研究に従事することとなっていた。だが、イギリス滞在中の同年11月、助成期間終了直前にカレツキは、ポーランドにおける同僚の解雇に抗議して同研究所を辞職した。これは、ファイエルが紹介するところの「抗議の辞職の連続」の1回目と言えよう。その後、2度にわたる延長を経て、カレツキは1938年1月5日に助成金の最終日を迎えていたが、その後が問題であった⁴。

幸いにして、1938年1月1日から同年6月30日までの期間、ケンブリッジ大学から研究資金を得て、これまでの研究成果をまとめることとなった(Osiatyński (1990), p. 507)。1937年11月19日までにはこの件が内定していたことが財団記録から伺われることを除いて(元木(2009), 99頁)、管見の限り、この研究資金が得られた経緯は定かではないが、ここにケインズの影響力を推測するのは不自然ではなかろう⁵。

ともあれ、カレツキの研究成果は『経済変動理論論文集』(以下、1939年論文集)にまとめられたが、同書の序文(foreword)または序論(introduction)をケインズが書くことになっていたとの説があり、異論も提出されているので、ここで整理しておこう。

この件に関する情報の初出は、管見の限り、1979年に出版されたポーランド語版カレツキ全集(*Dziela*)第1巻におけるオシャティンスキの編注である⁶。ここでオシャティンスキは根拠を示すことなく「ケインズはこの本[山本注: 1939年論文集]のために序文を書くこととなっていた」(*Dziela*, 1, s. 517)と記した上で、同書の校正刷が送られてきたことを受けての1939年1月7日のケインズからカレツキ宛の手紙の抜粋をポーランド語訳で紹介し、「ケ

² 「商品税、所得税、および資本税の理論」(Kalecki (1937b)), 「ブルム実験の教訓」(Kalecki (1938a)) 及び「国民所得の分配の決定要因」(Kalecki (1938b))。

³ カレツキ自身によるものと第三者によるものと合わせての先行性に関するサーベイ的先行研究として、元木(1989)及びChapple(1996)がある。

⁴ 辞職と助成金延長の経緯について、詳しくは山本(2021), 122-124頁を参照のこと。

⁵ ただし、1937年5月16日にケインズは心臓発作に見舞われ、翌1938年2月11日に主治医が通常の活動へ徐々に復帰することを認めるまで静養を余儀なくされており(Dostaler(2007); 邦訳, 604-605頁)、どこまで先頭に立って動いたかは疑問なしとしない。

⁶ ポーランド語及びフランス語の翻訳にあたっては、Google翻訳を用いていったん英語に機械翻訳し、それから筆者の責任において日本語への翻訳を行った。

インズは、しかしながら、当時病に倒れており、その結果として、『論文集』は1939年2月に彼の序文なしで出版された」(同)と記している。

これに対して反論を行ったのがPatinkin (1982)である。パティンキン、ケインズの手紙の全文を英語の原文で紹介した上で脚注において、「ケインズがここに挙げている誤植は同書の出版されたバージョンには残っており、このことはそれに対するいかなる修正も遅すぎる段階になってカレツキがその校正刷を送ったことを示唆している。よって、その校正刷はケインズがその本への序文を書くことになっていたから彼に送られ、そして病気のために彼はそうすることが出来なかったとのオシャティンスキの主張 (editorial note in Kalecki, *Dzieła* [Works], vol. I, p. 517) を受け入れるのは困難であることが分かる」(Patinkin (1982), pp. 101-102, () 内は [] も含めて原文ママ) と主張している。

これを受けて英語版カレツキ全集 (CWMK) 第1巻の編注においてオシャティンスキは、ポーランド語版と異なり次のように根拠を示している。

カレツキ夫人の記憶によると、ケインズがその本への序文 (foreword) を書くことになっていたが、おそらくは彼の病のためにこのことはなされなかった。ジョン・ロビンソンの記憶によると、1976年に筆者に語ったところでは、彼女とリチャード・カーンがケインズに序文を書くように依頼する予定であった。しかしながら、彼らが実際にはケインズに働きかけなかったのか、それとも彼がそうしなかったかは、不明である。とにかく、その本の校正刷を受け取ったことに謝意を表するケインズの手紙には序文への言及は見当たらない。

(Osiatyński (1990), p. 511)

そして、今度はケインズの手紙の全文を英語の原文で紹介した上で、「ドン・パティンキンは、彼の『先行』の101-2頁において、いかなる修正も遅すぎる段階になってカレツキが校正刷を送ったか、あるいはケインズが返信す

るのが遅くなったかのどちらかであると、正しくも注釈を行っている」(Osiatyński (1990), p. 512) と記している⁷。

これにより、情報源はカレツキ夫人とロビンソンの証言であったことが分かる。なお、カレツキが校正刷を送った時期についてオシャティンスキはパティンキンに同意を示しているかのようなのであるが、注意深く読み比べると、ここでオシャティンスキは、「あるいはケインズが返信するのが遅くなったかのどちらかである」と、パティンキンが注釈において言及しなかった可能性を付け加えている。これは、ケインズが書く序文を反映させるのに十分余裕がある時期にカレツキが校正刷を送った可能性があるとのオシャティンスキ自身の考えを不用意にパティンキンにも帰着させたものと言えよう。

この問題に関して別の証言を紹介するのがSawyer (1985) である。ソーヤーは、1984年2月9日のカレツキ夫人からの手紙として、以下を紹介する。

私は、ロビンソン夫人がミハウに帰せたものを認めておりません。すなわち、まだストックホルムにいたとき、いくつかの高尚な理由から彼のケインズに対する先行性を曝露しないよう決意したということです。ロンドンに着いて以降はじめて、私たちはその問題について考えました。そして私たちは、もしも彼が先行性を主張したら彼はむしろ疑いの目で見られるとの結論に達しました。ポーランドから来たよそ者が……十分に確立された地位と評判を持つ人物であるケインズに立ち向かう [ことはできませんでした]⁸。また、周知のように、彼の理論は1つの出版物において一貫して提示されてはいませんでした。

彼の先行性は結局のところ完全な秘密ではなかったことを付け加えなければなりません。彼には、彼の本である『経済変動理論論文集』を出版する際にケインズがその序論 (introduction) を書くことを引き受けてくれると期待するいくつかの理由がありました。彼は彼自身に対する著者の先行性にそのとき言及してくれると期待されていたのです。このことは、ケインズが重い病気に罹ったため実現することはありませんで

⁷ なお、Kalecki (1939a) のCWMK第1巻への収録においては、ケインズが指摘した誤植は本文において校訂され、その旨編注において明記されている (Osiatyński, (1990), p. 512)。ただし、オシャティンスキが引用するケインズの手紙において「cracks」と指摘されている箇所は、おそらくはケインズが読んだ校正刷と同じ表記と思われる出版された本では「cracs」となっており (Kalecki (1939a), p. 145)、パティンキンが引用するケインズの手紙においても「cracs」とある (Patinkin (1982), p. 102)。なお、その箇所の元となった初出論文においては「cracks」とある (Kalecki (1937a), p. 95)。

⁸ スtockホルムでケインズの『一般理論』を初めて読んだときではなく、ロンドンに着いて以降、先行性の主張を封印することにしたとのカレツキ夫人の証言は、山本 (2021) における、ロビンソンが読んだ「景気循環の理論」の草稿においては先行性が明記されていたのではないかと状況証拠に基づく推測に、さらなる状況証拠を与えることであろう。山本 (2021) 執筆時点において、カレツキ夫人のこの手紙は既に読んでいたものの、その含意に気付いていなかったが、この場を借りて補足を行う。

した。

(Sawyer (1985), pp. 183-184, 中略及び [] 内は原文ママ)

すなわち、情報源はオシャティンスキの情報源の一人と同じくカレツキ夫人であるところ、夫人がオシャティンスキに伝えた内容がより詳細に語られたと言えよう。

序文の件についての明示的な言及はないものの、ファイウェルはFeiweil (1975) において晩年のカレツキの証言を伝えている。

彼の死の直前、後知恵で考えてみても、別の行動は取らなかったであろうとカレツキ教授は私に打ち明けた。公表についてのカレツキの先行性の問題をケインズの前に持ち出すのはケインズの弟子たちに任されていたと彼は見なしていた。彼は、彼自身がそれを行わなかったことについて後悔していなかった。実のところ、彼は、ケインズの世界的な評判と学術的かつ知的地位がケインズ革命の宣伝と受容におそらく大いに寄与したと認めていた。ケインズの威信の高い名前の支えがなければ、新しいアイデアはあと20年かそれ以上の間忘れられていたかも知れない。「……ミハウ・カレツキが最初に認めたように、西側のアカデミックな経済学におけるケインズ革命は、そのように呼ばれるのが正しい。と言うのは、ケインズの広範な視野、きらめく論争の才、そして何よりも、彼がその中で育まれた正統派の砦における彼の地位なしには、反啓蒙主義の壁を打破するにはずっと長い時間がかかったであろうからである。」(Joan Robinson 1964⁹, p. 339) しかし人間であるから、ケインズの解説者の地位に貶められたことをカレツキは疑いなく恨んでいた。いかなる創造的な業績もその著作者の一部であって、我々はみな我々がすることに対して何らかの形の承認を求めるのである。

(Feiweil (1975), p. 25)

さらにファイウェルは、Feiweil (1989) においてカレツキ夫妻の証言を伝えている。

ケインズがどれだけ多く、あるいは少なくカレツキと彼の業績について話を聞いたか、その背後にあ

る理由、そしてケインズは耳を傾けるつもりがあったのかは、永遠に謎のままであろう。カレツキ自身は彼の公表の先行性の事実をケインズの前に持ち出すことはなかった。彼の死の直前、彼自身がそれを行わなかったことについて後悔していないとカレツキは私に打ち明けた。公表についてのカレツキの先行性の問題をケインズの前に持ち出すのはケインズの弟子たちに任されていたと彼は見なしていた。アダ・カレツキ夫人(カレツキの未亡人)の記憶によると、ジョン・ロビンソンもサーカスの他のどのメンバーも公表についてのカレツキの先行性をケインズに伝えなかったものの、カレツキの『経済変動』の本に関連して彼らはそうすることが期待されていた。と言うのは、彼らはケインズに序文 (foreword) を書くよう依頼するつもりであったからである。その当時ケインズは病気であったが、おそらく周囲の人々は彼の気に障ることはしたくなかったのであろう。カレツキは、ケインズの世界的な評判と学術的かつ知的立場がケインズ革命の宣伝と受容におそらく大いに寄与したと認めていた。しかし人間であるから、ケインズの解説者の地位に貶められたことをカレツキは疑いなく恨んでいた。いかなる創造的な業績もその著作者の一部であって、我々はみな我々がすることに対して何らかの形の承認を求めるのである。

(Feiweil (1989), p. 52)

一見して明らかのように、カレツキの証言部分はFeiweil (1975) におけるものとほとんど同じである¹⁰。序文の件については明示的にはカレツキ夫人の証言のみに登場するものの、カレツキの証言における「公表についてのカレツキの先行性の問題をケインズの前に持ち出すのはケインズの弟子たちに任されていたと彼は見なしていた」との部分も序文の件のことであつたと見なしても不自然ではないであろう。

以上の証言を総合的に考えると、実際になされたかはともかくとして、ロビンソンらケインズの弟子たちがケインズに序文を依頼することになっていたか、少なくともカレツキはそうのように期待していたと判断してよいように思われる。

実際、1939年1月11日のロビンソンからカーン宛の手紙には、「メイナードがカレツキの本を気に入ってうれしく

⁹ Robinson (1964)。ただし、ロビンソンの原文においては「ケインズ革命」が引用符で囲まれていたが、ファイウェルによる引用の通りに訳した。

¹⁰ 日本語としての不自然さを厭わず、細かな表現の違いも訳し分けるように心掛けた。

思います。先行性についてのデリケートな問題は「いったいどうなったのでしょうか?」(Marcuzzo (2020), p. 500; (2022), p. 14)とあり¹¹, 彼らが序文を依頼する任にあったかどうかは判然としないものの、1939年論文集の校正刷が「先行性についてのデリケートな問題」を孕むものであることをロビンソンとカーンが認識していたことを裏付けている。なお、ケインズに対するカレッキの先行性についてロビンソンは1936年9月16日のカレッキ宛の手紙で承認していたところであるが¹², まさに同日のロビンソンからカーン宛の手紙には、「私のポール [山本注: ポーランド人] は本当に知的な男性です (魅力には欠けるけど)。『一般理論』の多くに先行していたとの彼の要求は1933年に執筆された『エコノメトリカ』の論文¹³によって実証されます」(Rosselli (2005), p. 273)とあり、同意するかはともかくとして少なくともロビンソンがカレッキの先行性を承認していたことをカーンは認識していた。

一方、序文の件についての明示的な言及はないものの、トポロフスキはToporowski (2011)においてコヴァリクの証言を伝えている。

タデウス・コヴァリクは、ケインズの存命中においてもジョン・ロビンソンはカレッキの先行性の問題をケインズに持ち出すと約束したが、ぐずぐずしたと私に指摘している。カレッキはコヴァリクに、結局のところ彼自身がケインズにその問題を持ち出したと語った。しかしケインズは、後のジョン・ロビンソンと同様、このことを彼の「発見」の「科学的な」性質の確認としてのみ扱った。

(Toporowski (2011), p. 173)

また、ほとんど同じ証言がToporowski (2013)においても繰り返されている¹⁴。

タデウス・コヴァリクは、ケインズの存命中においても、ジョン・ロビンソンはカレッキの先行性の問題

をケインズに持ち出すと約束したがぐずぐずしたと私に指摘した。カレッキはコヴァリクに、結局のところ彼自身がケインズにその問題を持ち出したと語った。しかしケインズは、後のジョン・ロビンソンと同様、このことを彼の「発見」の「科学的な」性質の確認としてのみ扱った。

(Toporowski (2013), p. 167)

さらに、トポロフスキはToporowski (2018)においてコヴァリクの2006年のポーランド語文献を要約している。

1964年、カレッキはコヴァリクに、彼(カレッキ)はかつてロビンソンとカーンにケインズと会ってカレッキの先行性の問題を持ち出すよう説得しようとして、そして、彼らがそうしなかったとき、カレッキは勇気を振り起してケインズのところに行き彼に直接その問題を持ち出したと語った。この説明によると、ケインズは彼自身の無二の天才について豪語する演説で答えた。

(Toporowski (2018), p. 197, ()内は原文ママ)

これは、Toporowski (2011) 及び Toporowski (2013) で紹介された証言とほぼ共通する内容であるが、いささか表現が誇張されているようにも思われる。ともあれ、ここで重要なのは、ロビンソン(及びカーン)が先行性の問題をケインズに持ち出すはずであったところ、それが結局なされなかったというところまではこれまでの証言と一致するものの、カレッキが自らその問題をケインズに持ち出したということが明らかにこれまでの証言と矛盾するということである。これをどう考えたらいいであろうか。

まず、カレッキが相手によって言うことを変えていた可能性が考えられ、時間の経過とともに関係者の記憶があやふやになった可能性も考えられる。しかしながら、次のように考えれば、以上の全ての証言は、誇張によるぶれを除けば整合的に説明がつくのではないだろうか。すなわち、

¹¹ 1939年1月12日のケインズからロビンソン宛の手紙にはカレッキの校正刷に対する感想が述べられているところ (Marcuzzo and Sardoni (2005), p. 187), 時系列に不審な点が見られるが、あるいは手紙の日付の推定が間違っているのかも知れない。

¹² 詳しくは山本 (2021), 115-116頁を参照のこと。

¹³ Kalecki (1935b) のこと。同論文の冒頭には、「1933年10月計量経済学会ライデン大会に提出された論文」(p. 327)とある。なお、Kalecki (1935b) はCWMK第1巻にも収録されているところ、上記の部分は本文には収録されておらず、編注において紹介されている (Osiatyński (1990), p. 481)。

¹⁴ 日本語としての不自然さを厭わず、コンマの有無も含め、細かな表現の違いも訳し分けるように心掛けた。なお、Toporowski (2011) のタイトルである「Shared Ideas Amid Mutual Incomprehension: Kalecki and Cambridge」とToporowski (2013) 第14章のタイトルである「Shared Ideas amid Mutual Incomprehension」とはコロン以下を除いてほとんど同一であるところ、Toporowski (2011) の内容の大部分はToporowski (2013) 第14章に、一部は同書第13章に再利用されているにもかかわらず、Toporowski (2013) にはその旨の記述がなく、そもそもToporowski (2011) は参考文献としてすら言及されていない。

カレツキは、ケインズに対する先行性をケインズ自身が認める序文を執筆してくれるよう、ロビンソンやカーンに依頼し、彼らは「考えてみる」などとカレツキに期待を持たせる対応を行った。しかし結局序文の依頼はなされず、そこでカレツキは自らケインズに校正刷を送りつけた。ただし、それは序文を依頼するには遅すぎる時期であり、かつ、カレツキも明示的に自らの先行性について主張したわけでもなかった。しかしながら、ケインズが校正刷を読みさえすればカレツキの先行性に気が付くはずであるとカレツキは期待した、と。このように考えれば、カレツキはケインズに先行性の問題を持ち出すことはなかったとも言えるし、持ち出したとも言えよう¹⁵。

ではなぜカレツキは、ケインズが校正刷を読みさえすればカレツキの先行性に気が付くはずであると期待したのであろうか。そこで、1939年論文集の内容を検討することしよう。

(2)『経済変動理論論文集』における「既に事情に通じた読者でなければ意味をなさない」先行性の主張

1939年論文集は2つの部に分けられており、それぞれ3つの章が含まれ¹⁶、その前に序文が付けられている。「景気循環の理論」は加筆の上第2部第6章として収録されているところ、書評を含めて三者の構成を比較したのが「表1：1936年書評・1937年論文・1939年論文集の比較」である。

1939年論文集には次のようなピンク色の表紙カバーが付けられていたという。「本書は現代経済思想における3つの重要な潮流の統合を提示するものである。すなわち、不完全競争の教義、ケインズ理論、そしてスウェーデン学派の考え」(Toporowski (2013), p. 117)。以下に紹介する序文において言及されるテューの証言によると、これはカレツキが執筆したものではないという(同, p. 165)。

カレツキ自身による序文の全文は次のようなものである。

序文

これらの論文は、形式的には独立しているが、それにもかかわらず一体を成している。それぞれの論文はそれ自体として興味深い問題を取り扱うが、同時にそれはその後続く論文の基礎を提供する。特に最初の5つの論文は6番目の論文を導くものであり、6番目の論文は景気循環の理論を含む。

以下は関係する編集者の許可を得て(全て重要な加筆の上)再録されているものである。「国民所得の分配」¹⁷、『エコノメトリカ』, 1938年4月, 「危険増の原理」, 『エコノミカ』, 1937年11月, 及び「景気循環の理論」, 『レビュー・オブ・エコノミック・スタディーズ』, 1937年2月。

私はジョーン・ロビンソン夫人に非常に多くを負っているが、彼女のコメントのおかげで私は様々な改善をすることが出来た。また、文体の改善にはブライアン・テュー氏に非常に多くを負っている¹⁸。私はまたP・スラッファ氏とR・F・カーン氏の貴重な意見に感謝しなければならない。

ケンブリッジ,

M・カレツキ

1938年6月

(Kalecki (1939a), p. 7; CWMK, I, p. 234)¹⁹

この序文は、「景気循環の理論」の第2節「短期均衡」に相当する部分がなぜ1939年論文集の第6章には含まれていないかを説明する。と言うのも、「景気循環の理論」の第2節「短期均衡」は、カレツキが言うところのケインズ理論の2つの構成要素のうち第1の部分のカレツキ独自の方法で再構成したものであるが、表1からも分かるように、これは書評においては先行性の主張を行う第5節の言わば前提をなすものであったところ、「景気循環の理論」において先行性の主張が封印されたことに引き続き、1939年論文集においてはその前提をなす部分も姿を消し

¹⁵ Sawyer (1985) への書評において Mitra (1986) が「ケインズは序論を書かないことを選択した」(p. 1990) などとして「ケインズの側の思いやりの欠如」(同)を主張していることに反論して、Bhattacharjea and Raghunathan (1988) は、「実のところ、結局、彼は依頼されていなかったと見なすのが完全に道理にかなっていると思われる」(p. 1385)として、第II節において詳細に検討を行っているが、その点に関しては筆者も同意するものである。ただし、「もっと重要なことには、たとえ序論を書くよう依頼されていたとしても、なぜケインズがカレツキの先行性を直ちに認めると期待されていたかを認めることは困難である」(同)と主張している点については、異論を本稿で主張しようとするものである。

¹⁶ CWMK 第1巻に収録されたものからは、オシャティンスキによる編注も含めて、この事実が認識できなくなっている。

¹⁷ 正しくは「国民所得の分配の決定要因」であるが、ここでカレツキは、同論文が(加筆の上)再録されているところの本論文集第1章と同じタイトルにしている。

¹⁸ ここで言及されているテュー自身がケインズとの比較の観点から本論文集を解説したものとして Tew (1999) を参照のこと。

¹⁹ オリジナルにおける「FOREWORD」がCWMK収録版においては「Foreword」になっていたり、「THESE essays」が「These essays」になっていたり、その他コンマの有無で多くの異同が存在するが、以下、1939年論文集からの引用にあたっては両者のページ番号を併記するものの、原則として異同の指摘は行わないこととし、またオリジナルを底本とすることとする。

表1：1936年書評・1937年論文・1939年論文集の比較

1936年書評 「ケインズ理論に関する所見」	1937年論文 「景気循環の理論」	1939年論文集 「景気変動理論論文集」
		序文
		第1部
		第1章 国民所得の分配
		第2章 投資と所得
		第3章 貨幣賃金と実質賃金 ※フランス語論文への脚注
		第2部
		第4章 危険逡増の原理
		第5章 長期利子率
		第6章 景気循環の理論 ※フランス語論文及びエコノメトリカ論文への脚注
1 [序論]	[1] 序論	
※ケインズ理論の2つの構成要素	1 [ケインズ理論の2つの構成要素]	
※仮定	2 [仮定]	[1] 方法論と単純化の仮定
		[2] 仮定再論
2 [資本家支出による国民所得とその分配の決定]	[2] 短期均衡 1 [資本家支出による国民所得とその分配の決定]	
3 [投資による資本家支出の決定]	2 [投資による資本家支出の決定]	
4 [投資による短期均衡の決定とケインズの乗数]	3 [投資による短期均衡の決定とケインズの乗数]	
5 [小括及び利子率と貨幣賃金に関する補足並びに先行性の主張] ※『景気循環理論』への3つの脚注		
6 [ケインズの投資理論の問題点及びカレツキ自身の投資理論の素描並びに結論]	[3] 短期均衡の連鎖としての動態過程	[3] 投資決定と投資
		1 [投資の定義]
※後半：投資決定と投資の違い	1 [投資決定と投資の違い]	2 [投資決定と投資の違い及びタイムラグ]
	2 [投資決定と投資のタイムラグ]	
		3 [平均建設期間]
	3 [名目投資変化の実質投資変化と価格変化とへの分解]	
※後半：投資決定→投資→投資決定の連鎖	4 [投資決定→投資→投資決定の連鎖]	4 [投資決定→国民所得→投資決定の連鎖]
	[4] 投資誘因	[4] 投資誘因
※前半：ケインズの投資理論の問題点	1 [ケインズの投資理論の問題点]	
※結論		
	2 [危険逡増の原理]	1 [集計量における危険逡増の原理]
	3 [投資決定論の定式化]	2 [投資決定論の定式化]
		3 [給料稼得者と金利生活者は貯蓄しないとの仮定の再論]
	[5] 投資決定の2要因	[5] 投資決定の2要因
		1 [結論の予告]
	1 [所与の資本設備における投資の予想利潤率への影響]	
	2 [所与の資本設備における投資の利子率への影響]	
	3 [所与の資本設備における投資の関数としての投資決定]	2 [所与の資本設備における国民所得の関数としての投資決定]
	4 [所与の資本設備における投資決定関数の形状]	3 [所与の資本設備における投資決定関数の形状と投資決定の関数としての国民所得]
		4 [例外としての完全雇用]
		5 [先行研究批判]
	5 [資本設備の変化]	6 [資本設備の変化]
	[6] 景気循環	[6] 景気循環
	1 [資本設備の変化を捨象した場合の投資決定と投資]	1 [資本設備の変化を捨象した場合の投資決定と国民所得]
	2 [資本設備の変化を考慮した場合の投資決定と投資]	2 [資本設備の変化を考慮した場合の投資決定と国民所得]
	3 [景気循環の概要の説明と景気循環の必然性]	3 [グラフによる景気循環の概要の説明]
		4 [言葉による景気循環の概要の説明]
		5 [景気循環の必然性]
	4 [結論]	6 [結論]

注：[] 内及び※以下は、原文には存在しない筆者による補足。

たことで、先行性の主張の封印がさらに徹底されたと解釈することも可能だったからである²⁰。しかしながら、その解釈は不適當であることが序文から分かる。

「景気循環の理論」は、それ自体が1個の完結した論文であった。よって、景気循環について論じるための前提条件として同論文の最初の部分が必要であった。それが今回、全6章から成る1冊の本の最終章として収録されるにあたり、前提条件の部分は第1章から第5章までに移されたと思えることが出来よう。具体的には、「景気循環の理論」の第2節「短期均衡」の部分（書評においては第2節から第4節に相当するとともに、第5節における先行性に関する第1の脚注に相当する部分であるところの有効需要の原理）については、1939年論文集においては第2章「投資と所得」が相当する。また、書評第5節における先行性に関する第2の脚注に相当する部分であるところの流動性選好理論については、第5章「長期利子率」が相当する。さらに、書評第5節における先行性に関する第3の脚注に相当する部分であるところの賃金理論については、第3章「貨幣賃金と実質賃金」が相当する。

この中でも注目すべきは第3章「貨幣賃金と実質賃金」である。ここでは、完全競争の場合、「よって賃金切下げによっては物価の「一般水準」を除いて何も変化せず、よって、彼らが最初にそうしなかったのであれば資本家が彼らの消費と投資の量を後に増加させる理由はない」（Kalecki (1939a), p. 79; *CWMK*, I, p. 276）との本文に対して、「私は既に私の論文「景気循環運動の理論」、『政治経済学雑誌』, 1935年3・4月, 301-2頁, において賃金の問題をこのような方法で取り扱っていた」（同）²¹との脚注を付けている。まさしくこれは、書評における先行性に関する第3の脚注の復活に他ならない。ただし、書評においてはポーランド語である『景気循環理論』が参照されていたところ²²、ここではより利用可能性の高い言語で記されたフランス語論文（Kalecki (1935a)）が参照されている。

そこでフランス語論文の該当箇所を確認してみると、確かに「賃金引下げは労働者の側において消費財への需要の減少をもたらすが、それは資本家の消費のそれに相当する増加によっては埋め合わされず、よってそれに続く物価の下落は賃金引下げによって引き起こされた追加的利潤を相殺してしまう」（Kalecki (1935a), pp. 301-302）とある。

ポーランド語で記され、しかも商業出版社からではなく研究所から発行された小冊子である『景気循環理論』ではなく、その気になれば誰でも取り寄せることの出来るフランス語論文を参照先に変更することにより、現実には必ずしも当時の英語圏の知識人の全てがフランス語を読めたわけではないにせよ、学界の慣例としてはこれで先行性の主張がなされたと見なしてよいのではないだろうか。

では、先行性に関する第1の脚注に相当する第2章「投資と所得」と、第2の脚注に相当する第5章「長期利子率」についてはどうであろうか。一見したところ、先行性に関する脚注は見当たらない。しかしながら、1939年論文集を総括すべき第6章「景気循環の理論」の冒頭において次の脚注が付けられている。

この論文は『レビュー・オブ・エコノミック・スタディーズ』1937年2月号に掲載された論文に加筆したものである。その中の本質的な考え（The essential ideas）は私の「景気循環運動の理論」、『政治経済学雑誌』, 1935年3・4月, 及び数学的な形式において「景気循環のマクロ動学理論」、『エコノメトリカ』, 1935年7月, において既に展開されていた。

（Kalecki (1939a), p. 116; *CWMK*, I, p. 298）

ここでもまた、ポーランド語の小冊子ではなくフランス語論文及びエコノメトリカ論文が参照されている。この脚注は1937年2月の論文「景気循環の理論」には存在しなかったものであり、1939年論文集への収録にあたってわざわざこのような脚注を入れたということには、どのような意図があるのだろうか。

それは、「本質的な考え」が何を意味するかによる。一見するとそれは同章のタイトルであり、それがもとなった1937年論文のタイトルにも含まれ、さらにフランス語論文やエコノメトリカ論文のタイトルにも含まれるところの「景気循環」についての考えであり、もう少し具体的に言うと、投資の増加関数であり資本の減少関数であるところの投資決定関数に基づくところの景気循環理論であろう。実際、それが言葉とグラフを用いて直感的に展開されたのがフランス語論文であり、差分微分混合方程式を用いて数学的に厳密に展開されたのがエコノメトリカ論文であり、

²⁰ 山本 (2020) の時点では、研究が進展していなかったとは言え、そのような解釈に立っていた。

²¹ *CWMK* 第1巻においては、編注ではなくカレッキ自身による脚注に続けて、「see also p. 100 above」と同巻におけるページ番号が明記されているが、参照先はKalecki (1935a)ではなくKalecki (1933a)である。なお、*CWMK*にはKalecki (1935a)そのものはまとまった形では収録されておらず、Kalecki (1933a)への編注において必要に応じてKalecki (1935a)との異同が説明されている。

²² 参照先におけるカレッキの議論については、山本 (2020), 131頁を参照のこと。

別のグラフを用いて展開されたのが1937年論文であり、投資によって国民所得が決定されることから投資に代えて、国民所得の増加関数であり資本の減少関数であるところの投資決定関数に基づかせてまた別のグラフを用いて展開されたのが1939年論文集であった。

だがここでは、そのような形で投資決定関数が機能するそもそもの前提として、有効需要の原理（先行性に関する第1の脚注）と流動性選好理論（先行性に関する第2の脚注）があり、「本質的な考え（The essential ideas）」とはそれらを含むものであると考えるべきではないだろうか。それでこそ、「本質的な考え」が複数形であることと整合するのではないだろうか。すなわち、第6章における脚注は、第3章における脚注と合わせて、先行性の主張の封印を全面的に解き放ったものと解釈されるべきではないだろうか。

あるいはここで、ではなぜ第3章「貨幣賃金と実質賃金」において先行性に関する脚注が付けられていたのか、第6章における包括的な脚注1つだけで十分ではないかという疑問が生じるかも知れない。それについては、賃金理論（先行性に関する第3の脚注）は「本質的な考え」というよりも派生的な考えであるとの説明に加え、次のような説明も可能であろう。

ここで、Kalecki (1938b) では本来はカレッキ自身の理論であるのに「賃金に関するケインズ理論」として説明されていたことを想起しよう²³。Kalecki (1938b) は加筆の上1939年論文集の第1章として収録されているが、その箇所はどうなっているであろうか。実は、「賃金に関するケインズ理論」のくぐりにはKalecki (1938b) における「景気循環における国民所得の分配の変化」との節の、「我々はここで、貨幣賃金の変化が国民所得の分配に与える影響に関する特殊問題を検討することとしよう」（Kalecki (1938b), p. 111; *CWMK*, II, p. 19）から始まる第2小節で述べられていたのであるが、この小節に相当する部分は1939年論文集の第1章には存在しない。それは第3章において、Kalecki (1938a) における実証を踏まえつつ展開されている。すなわち第3章は、形式的には書き下ろしであるが、Kalecki (1938b) において「賃金に関するケインズ理論」として簡潔に述べられていた部分を、Kalecki (1938a) における実証を踏まえつつ、独立した章として膨らませたものなのである。

よって、1939年論文集の第3章においてあえて第6章との重複を厭わず先行性に関する脚注が行われているのは、それはもともとKalecki (1938b) において先行性に関する脚注を伴うことなく「賃金に関するケインズ理論」として

言及されていたところ、そのことに対する訂正または補足の意図を強調したものと解釈できるのではないだろうか。

以上が、ロビンソンが1971年に「彼は公表の先行性を公に言及したことは決してなかった（例外として彼の最初の英語の本の1つの脚注があるが、それは既に事情に通じた読者でなければ意味をなさないものであった）」と言及したところのものであった²⁴。

ここにおいてカレッキは、ロビンソンの指摘を受けて先行性の主張を封印したKalecki (1938b) までの方針を転換し、読む人が読めば分かるような形で暗に先行性を主張するようになったと言えよう。おそらくそれは、カレッキ自身の口からではなく、第三者によって自らの先行性を広めてもらいたいという作戦であったと考えられる。そしてその作戦の第1の標的が、序文を書いてもらうはずであったケインズその人であったのではないだろうか。そして第2の標的が、1939年論文集の読者であったのではないだろうか。

(3) カレッキの先行性は理解されたのか

では、上記の作戦は成功したのであろうか。以下、同時代の証言を検討してみることにしよう。

まず、第1の標的であるケインズについて。序文の件はともかくとして、ケインズは1939年論文集の校正刷を受け取っているところ、カレッキに対する感想の手紙を確認してみても、ロビンソンが「景気循環の理論」の草稿に目を通した上でエコノメトリカ論文を読み直してみて「あなたの『エコノメトリカ』論文を読んで私は恥ずかしくなります。私たちはずっと以前からあなたを一族としてお迎えすべきでした」（Osiatyński (1990), p. 502）と手紙に書いてきたようなくぐりは存在しない。

なお、ケインズからカレッキ宛の手紙には「あなたの本の校正刷を私にお送りくださりまことにありがとうございました。私はそれらを元となった論文と比較してあなたがどれほど修正されたかを確認しておりません」（Osiatyński (1990), p. 511）ともあり、文字通り受け取るとそこまで細かくは読んでいないということであろうが、穿った見方をすれば、実はカレッキの先行性に気付きながらも気付いていないふりをし続けるための方便であると読めなくもない。同様の記述はケインズからロビンソン宛の手紙にも見られ、「私は彼が再録しているこれらの論文を元となった論文と比較して彼がどれほど変更したかを確認しておりません」（Marcuzzo and Sardonì (2005), p. 187）とある。どちらであるかは、ファイウェルが言うように「永遠に謎

²³ 山本 (2021), 126-127頁を参照のこと。

²⁴ 厳密には2つの脚注であるが、ロビンソンの念頭にあったのはおそらく第6章の方であると思われる。

のままであろう)。

次に、第2の標的である1939年論文集の読者について。管見の限り、論文集には4つの書評が存在する。以下、公表の時系列に沿って検討を行うこととする。

第1に、ドップによるものがある(Dobb (1939))。ケインズとの関係に関しては、「論文集の1つはケインズ氏の方法と類似した方法で経済危機の原因の分析にあてられているが、資本主義のもとでの危機の避けられない原因としての「利潤率の傾向的低下」に主に強調を置く形で取り扱われている」(Dobb (1939), p. 4)とあり、ケインズに対する先行性には気付いていない様子で、マルクス経済学に引き付けて理解している²⁵。

第2に、ミードによるものがある(Meade (1939))。ケインズとの関係に関しては、「カレッキ博士は本書において6つの刺激的な論文をまとめて公刊したが、その主要な目的は不完全競争理論のある種の面をケインズ氏による雇用と産出の一般水準における変動理論の発展に応用することにある」(Meade (1939), p. 300)とあり、ケインズに対する先行性に気付いていないどころかケインズ理論の「応用」と見なしている。逆に、所得分配をめぐる論点についてはあるが、「J・M・ケインズ氏は『エコノミック・ジャーナル』1939年3月号の彼の論文「実質賃金と産出量の相対的変動」において既にこの点を強調している」(同, p. 302)との脚注があり、あたかもこの論点についてのケインズの先行性を指摘しているかのような印象を読者に与えかねない。実際には、「実質賃金と産出量の相対的変動」(Keynes (1939))はKalecki (1938b)及びそれが加筆の上収録されたKalecki (1939a)に言及しているところ、『一般理論』とは別のある特定の論点に関してカレッキの先行性を認めているものであり、それを踏まえミードによる書評のこの脚注は、カレッキの研究の重要性については

ケインズも認めているという意味に取れなくもないが、この書評だけからそれを読み取るのは困難と言わざるを得ない。

第3に、クズネッツによるものがある(Kuznets (1939))。ケインズとの関係に関しては、「第3の論文はケインズの方針に沿って貨幣賃金と実質賃金を扱っており」(Kuznets (1939), p. 805)とあり、ケインズに対する先行性に気付いていないどころかあたかもケインズ理論の応用であるかのように見なしている。これは、上述したように第3章の脚注においてはフランス語論文を参照した上でカレッキが明示的に先行性を主張していたことからするとまさに「どこに目を付けていたのか」と言いたくなるような評価であるが、当時のケインズとカレッキの社会的立場の違いを予断としての通常の読者の受け取り方を示したものとさえ言えよう。

第4に、ランゲによるものがある(Lange (1941))。ケインズとの関係に関しては、「『貨幣賃金と実質賃金』に関する論文は、貨幣賃金の水準の普遍的で比例的な変化が与える効果に関するケインズ氏の教義の再説 (restatement) を提供する」(Lange (1941), p. 282)とあり、クズネッツと同様、第3章の脚注を見逃していたと受け止めざるを得ない。しかしながら、次のような注目すべき記述がある。「最後の論文「景気循環の理論」は、今では現代景気循環理論の古典となっている。これは元々は『レビュー・オブ・エコノミック・スタディーズ』(1937)で公表されたものであり、『政治経済学評論』(1935)及び『エコノメトリカ』(1935)におけるカレッキ氏の理論の所説 (statement) を引き継ぐものである。最初の所説はポーランド語で1933年に公表された」(同, p. 283)。ここで、1939年論文集の第6章は直接的には1937年の「景気循環の理論」に基づくものであるが、1935年の2本の論文に遡る

²⁵ フェイウェルは、「アバ・P・ラーナーは最近私に、彼は最初にケンブリッジの外からケインズ革命に転向した一人であり1936-37年にロンドンでカレッキを頻繁に見かけたにもかかわらず、カレッキは公表についての彼の先行性を決して彼に語らなかったと語った。長い年月の後になってようやくラーナーはこの事実に気が付いた。同様に、モーリス・ドップは、カレッキをケンブリッジにいた初期の頃から知っていてカレッキの発見の独立性に気付いていたにもかかわらず、それらの発見が1936年以前にさかのぼることを認識していなかったと振り返っている」(Feiwel (1975), p. 457)と記している。

なお、ロックフェラー財団記録にも、1936年4月13日から7月13日までのロンドンにおける活動として、「ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスのハイエク教授のセミナーとロビンズ教授のセミナーに参加してケインズの理論を研究。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス講師のラーナー氏とも接触」(元木 (2009), 95-96頁)とあり、ラーナーの名前は特筆されている。「ロビンズのセミナーにおける議論では、カレッキが抱えている命題に対して他の誰かがそれはケインズの見解だと言うといったことがよく見られたが、その時カレッキは、それらの考えはずいぶん前から既に抱いていたと答えたものであった」(Kaldor (1989), pp. 7-8)とのカルドアの証言と、ファイウェルが伝えるラーナーの証言とは食い違う。ただ、「カレッキはまさに最初からセミナーの積極的なメンバーであった。最初の印象は、小さな男でキキキという大声で、全く理解しがたい英語を話すというものであった。彼は非常に強いなまりで話し、誰も彼の言うことが理解できなかった。しかし彼は粘り強く何度も口をはさみ、次第に状況は変化した」(同, pp. 3-4)ともあることから、あるいは最初はラーナーはカレッキの英語を聞き取れなかったのかも知れない。カレッキの英語がラーナーにも聞き取れるようになったのは、カレッキが先行性の主張を控えるようになった以降かも知れない。

ことはカレツキ自身が脚注で明記していたことである。しかしながら、それが1933年のポーランド語文献にまで遡ることは、1939年論文集にも「景気循環の理論」にも1935年の2本の論文にも明記されていない。ランゲはどのようにしてこのことを知り得たのであろうか²⁶。

ランゲはカレツキと同じポーランド人である。よって、ポーランド語で書かれた1933年の『景気循環理論』や1936年の書評そのものを読んでいたとしても不思議ではない。実は、ランゲは1939年、「経済学における新古典学派」においてポーランド語で、「M・カレツキはケンブリッジで展開されたものと類似した雇用理論を完全に独立に創り出し、その基礎の上に景気循環の理論を構築した」(Osiatyński (1990), p. 464) と述べていた。カレツキの

「景気循環の理論」[山本注：同名の論文のタイトルではなく普通名詞としてのランゲからの引用]が少なくとも1935年のフランス語論文及びエコノメトリカ論文において公表されていたことは容易に知り得るところであり、かつ、エコノメトリカ論文の冒頭において「1933年10月計量経済学会ライデン大会に提出された論文」と明記されており、そしてその基礎として「雇用理論」について言及している以上、これは有効需要の原理についてのカレツキの先行性を認めたものに他ならない。管見の限り、これは、ポーランド語においてではあるが、第三者がカレツキの先行性を事実上認めた初めての印刷された文献である²⁷。

ただし、ランゲの書評に戻ると、ここから有効需要の原理についてのカレツキの先行性を読み取ることは極めて困

²⁶ シュンペーターの『景気循環論』(Schumpeter (1939)) においても、カレツキの景気循環理論について、「この理論はくりかえし発表されてきた。最初の説明はポーランド語でのものであり、従つて著者にはいられていない」(Schumpeter (1939); 邦訳, 第1巻278頁)とあるが、「最初の説明」が「ポーランド語」でなされたことをどうしてシュンペーターが知り得たのかは謎である。

なお、シュンペーターは上記の引用に続けて「この英語での説明は一九三五年六月号の*Econometrica*誌上で発表され[山本注：Kalecki (1935b) のこと] (それにたいする註釈は、なかんずく、価格、賃銀がどのように暗黙的に模型にはいりこむかを示す筈であるが、*Econometrica*誌一九三六年一〇月号中にある[山本注：Kalecki (1936b) のこと])、もう一つは*Review of Economic Studies*誌一九三七年二月号中に発表された[山本注：Kalecki (1937a) のこと]。後者の中では、この理論はケインズ氏の理論と対比されている。本問題の細目にはここではたちいるわけにいかない。本書ではただ基本的な観念と含まれている原理についての註釈が示されるだけである」(同書; 邦訳, 第1巻278-279頁)と続けている。この記述を根拠にChapple (1996) は「シュンペーターは、カレツキの景気循環理論(これに彼は4ページの議論を捧げている)がケインズに先行したかも知れないとほめかしている」(p. 38)と記すが、この評価は不適切である。

確かに「後者」すなわちKalecki (1937a) においてはカレツキ自身の理論が「ケインズ氏の理論と対比されている」が、山本(2021)において詳述したように、それは先行性の主張を封印した上での対比に過ぎない。読む人が読めば、先行性の主張が明記されていなくてもKalecki (1937a) の議論はKalecki (1935b) にさかのぼり、そしてKalecki (1935b) においてKeynes (1936) に先行する命題が述べられていたことに気付くであろうが、シュンペーターがそれに気付いている気配はない。むしろ、「かれ[山本注：カレツキ]の理論は投資を循環上の継起関係についての記述の枢軸としようとする点で、十分に確立された伝統に従っているのであるが、独創的なやり方でそうしているのである」(Schumpeter (1939); 邦訳, 第1巻276頁)とした上で、「……かれは利潤プラス利子(=『資本家』の消費プラス貯蓄)を明示的に導入し、置換——置換需要は循環を通じて不変と仮定されている——以上の設備財にたいする注文を、利子プラス利潤および同時に存在している産業設備の総量に線型に依存させるのである。ついでかれは——この点が独創的な変更なのだが——両項目を新設備財にたいする発注高でもつて表現する」(同, 傍点は山本)として、景気循環過程における投資関数の特定の型にカレツキの独創性を見出している。その内容は上記の言葉による説明では分かりにくい、シュンペーターが上記の引用に続けて数式を用いてカレツキの理論を紹介する中で「もし $K(t)$ が t 時点に存在している設備の『量』(=修正価値での)であるなら、発注の『量』は利潤率と利子率との線型函数として表現されるだろう。しかしながら、カレツキ氏に従つて、われわれは従属変数として、発注量、 I ではなくて、相対量、 I/K を考察することをえらぶ」(同書; 邦訳, 第1巻277頁)とあることから、投資注文や利潤の絶対量においてではなく資本設備に対する相対量において議論を進める点にカレツキの独創性を見出していると言えよう。すなわち、シュンペーターは、カレツキと出会って以降のロビンソン(及びカーン)を除く当時の大多数の読者と同様、カレツキの景気循環理論に含まれるケインズに対する先行性に気付いていなかったと言わざるを得ない。

²⁷ 管見の限り、この文献が初めて紹介されたのはDziela第1巻のオシャティンスキによる編注においてポーランド語によってであるが(s. 453)、それが初めて英訳で紹介されたのはPatinkin (1982) においてであり、その際、ポーランド語の百科事典の一項目であったとの情報が付加されている(p. 60)。ただし、パティンキンは、「どれだけまじめにかつ一貫してランゲがこの要求を提出したのかは分からない」(同)と懐疑的に評価している。

なお、Chapple (1996) は、「早い時期におけるカレツキとケインズの間類似点についての指摘はラグナー・フリッシュによって行われた」(p. 38)として1936年の計量経済学会オックスフォード大会における発言をPhelps Brown (1937) から引用しているが、チャップル自身が「類似点についての指摘」と表現しているとおり、これはケインズに対する先行性の主張とは言い難い。たとえそうであったとしても、Chapple (1996) において引用されていない箇所も含めると、フリッシュは「労働供給に何ら制約がない場合ですら恒常的失業が生じる可能性は、ケインズ氏が最近の業績で注意を喚起したが、最近10年間にアモローゾ、ヴィンチ、ルース、フリッシュ、カレツキ及びティンバーゲンによってマクロ動学研究にもたらされてきたことを指摘した」(Phelps Brown (1937), p. 363) のであって、カレツキは6人のうちの1人でしかなくなってしまう。

難である。文言上は、あくまでもカレッキの景気循環理論は1933年に遡ることに言及しているだけであるところ、その景気循環理論は有効需要の原理に基づくものであり、したがってカレッキは1933年には有効需要の原理に到達していたということを読み取ることは、「既に事情に通じた読者でなければ」まず不可能であろう。しかしながら、ランゲは少なくとも1939年の時点において、カレッキは有効需要の原理の基礎の上に景気循環の理論を構築したと認識していたことは確かである。なぜそのことを1941年の英語の書評において分かりやすく記さなかったのかは不可解である²⁸。

以上、1939年論文集の校正刷を読んだケインズ並びに同書の書評を行ったドップ、ミード、クズネッツ及びランゲという当時の一流の知識人によって書かれたものを検討する限り、カレッキの先行性は理解されなかったか、少なくとも読者に理解され得る形では書かれなかったと言わざるを得ない。カレッキの作戦は失敗したのである。

(4) 国立経済社会研究所ケンブリッジ研究計画への就職

では、そもそもなぜこの時期にカレッキはこれまでの方針を転換して、「既に事情に通じた読者でなければ意味をなさない」ものであるとは言え、先行性の主張の封印を解くことにしたのであろうか。方針転換の時期は、カレッキ自身の雇用理論を「ケインズ理論」としていた『エコノミック・ジャーナル』1938年3月号に掲載されたKalecki (1938a) 及び『エコノメトリカ』1938年4月号に掲載されたKalecki (1938b) の執筆時期と思われる1937年末から1938年初にかけての頃から、1939年論文集の脱稿時期と思われる序文の日付である1938年6月頃まで、すなわち1938年前半であるが、以下、この前後の時期のカレッキの動きを整理してみよう。

先述の通り、ロックフェラー財団からの助成金は、2度の延長を経て、1938年1月5日までであった。それ以降のカレッキの身分がカレッキ夫妻の生計にとって死活問題であった。

財団記録によると、1937年11月19日のキットレッジからシクルへの申し送りと思われる項目において、ロンドンでのカレッキとの面談の結果として、ケンブリッジからカレッキに6か月の研究職 (research appointment) が与え

られたことが記載されている。この時点において、それは「ロビンソン夫人とデニス・ロバートソンの監督の下で現在進行中の²⁹どちらかと言えば理論的な多くの研究におけるケンブリッジのグループを補佐する」(元木 (2009), 99頁)のものであった。この目的が後になって変更されたのか、それともあくまでも名目上はそういう目的であったのかは不明であるが、いずれにせよ、1938年の1月から6月までは、カレッキは生活の心配をすることなく1939年論文集をまとめることが出来た。しかし、問題は先送りされただけであった。同項目において、ポーランドで適切な職を見付けることはほぼ絶望的であり、イギリスかそれ以外の地で定職を見付ける必要があることが記載されている。また、キットレッジがカレッキにメキシコでの職を提示したところ、カレッキは機会があればどんな職にでも応募したいと応えており、切羽詰まった状況が示されている。

同年12月21日のカーンからスラッフ宛の手紙においては、上記のメキシコについて、厳密にはロックフェラーの研究所ではないがロックフェラーの資金によるものであると説明を加えた上で、それ以外にジュネーブの国際連盟、「ホール研究所 (Hall's Institute)」,そしてジュネーブの国際労働事務局がカレッキの就職先の選択肢として挙げられており、自分たちに出来ることを探っている (Toporowski (2013), p. 105)。そして同日、カーンはジュネーブのミードにも手紙を書いて、国際連盟を念頭に、国際労働事務局の名前も挙げて、協力を依頼している (同, pp. 105-106)。

1938年1月27日のカーンからケインズ宛の手紙においては、「今や彼の様々な断片的な業績を包括的な本にまとめあげているところです」(Toporowski (2013), p. 106)とカレッキの状況を説明した上で、(a) ロックフェラー財団の資金援助を受けてメキシコ政府が設立しようとしている統計研究所、(b) 国際連盟におけるティンバーゲンの後任のポスト、及び (c) ホールが関係するところの「経済研究の新しい部署 (the new Bureau of Economic Research)」の3つの選択肢について比較検討しつつ、「彼に会うたびに彼のとんでもなくすばらしい能力にますます印象付けられます」(同, p. 107)としてケインズに協力を依頼している。

同月30日のケインズからカーン宛の手紙においては、「私

²⁸ あるいは、1939年論文集の第6章の「投資決定の2要因」の節の第5小節において、ミード及びヒックスと並んでランゲについても「ケインズ理論の単純化されたモデルを構築した多くの筆者は、B点で表される「均衡」に注目してきた。これは、彼らが投資決定と投資の区別をしなかった事実による。彼らはそれゆえ、B点で表されるものとは異なる位置に体系があることを理解することが出来なかったのである。／それに加えて彼らは資本設備における変化の影響を考慮しなかった」(Kalecki (1939a), pp. 139-140; CWMK, I, p. 313) などと批判されたことが気に障ったのであろうか。

²⁹ 元木 (2009) には「which are now under way the direction of」とあるが、元木氏のご厚意によりいただいていた財団記録のハードコピーには「which are now under way under the direction of」とある。

がカレツキのために何かしてやれる機会があるのであれば、そうします」と述べた上で、上記の3つの選択肢について比較検討しつつ、「私は次のエコノミック・ジャーナルに彼のこれまでの努力のほとんどよりも現実的な種類のカレツキによる論文を印刷しているところですが、これは、私が思うに、あなたが想定している種類の仕事に彼が就くのに役立つことでしょう」と締めくくっている (Toporowski (2013), p. 107)。ここで言及されている論文は、カレツキが自らの雇用理論を「ケインズ理論」とした上でフランスにおいて実証を行った Kalecki (1938a) である。

同年3月18日のケインズからカレツキ宛の手紙においては、英国海外銀行から断りの返事が来たことを伝えた上で、『エコノミスト』『フィナンシャル・タイムズ』『フィナンシャル・ニュース』の誌名を挙げて、寄稿だけで暮らしていけるか分からないかと断りつつ、カレツキの意向を尋ねている (Toporowski (2013), pp. 107-108)。

同月21日のカレツキからケインズ宛の手紙において謝意を示しつつもやはりそれでは暮らしていけないとやんわりと断られていたにもかかわらず (Toporowski (2013), p. 108)、同月22日にケインズはカーンにカレツキの手紙を同封した上で、『エコノミスト』に定職が得られるのであれば懸念はあたらないうと述べている (同)。

同月24日にカーンは早速『エコノミスト』の副編集長のクローザーに、「ケインズの考えを改良し拡張するのに理論面において大いに成し遂げた一方、彼の関心は主に経済理論を実際の問題に適用することにあります。ムッシュー・ブルムに関する彼の論文は……短い滞在期間において彼にとっての外国についての本質的事実を選び出す彼の能力を示しています」「彼は書くのも話すのも英語はなかなかのもです」などとしてカレツキの就職を依頼する手紙を書いている (Toporowski (2013), pp. 108-109, 中略は原文ママ)。ケインズ自身も同月30日に『エコノミスト』の編集長のレイトンに、「カレツキは、私の考えでは、ある種の天才です」「彼の話す英語はいささか奇妙ですが、彼の書く英語は申し分ありませんし、3月号のエコノミッ

ク・ジャーナルで彼のたいそうな論文を目にすることでしよう」などと手紙を書いている (同, pp. 109-110)。

同年4月26日にカーンはマンチェスター大学の研究部門 (Research Department) の長のジュークス、オックスフォード大学統計研究所所長のマルシャク、そして前述のミードに、カレツキの就職を依頼する手紙を同時に書いている (Toporowski (2013), pp. 111-112)。

同年5月のケインズからカーン宛の手書きのメモにおいては、プリンストン大学のリーフラーとカレツキについて話し合ったとして、プリンストン大学への就職の可能性について記されている (Toporowski (2013), p. 113)。

時期は不明であるが、カーンがウェールズ大学の経済学助講師としてカレツキを推薦する文書も残されている (Toporowski (2013), p. 113)。

同年6月末にケンブリッジでの任期が切れた後³⁰、同年7月2日のマルシャクからカーン宛の手紙においては、ローザンヌ大学法学部長から、ワルラスに始まりパレート、そしてボニンセグニに受け継がれてきたポストの後任の推薦を依頼する回状が来たとして、カレツキを推薦してはどうかと持ち掛けられている (Toporowski (2013), pp. 113-114)。二人は推薦状の下書きを作成し、署名人について相談を進めたにもかかわらず、同年9月6日のカーン宛の手紙において肝心のカレツキは、「あなたが言及される人々がローザンヌの椅子のために私を推薦していただけたら身に余る光栄です。しかしながら、私は当然のことながらフランス語で講義できないので実際問題として無理です」 (同, p. 115) と断っている。

ここでカレツキがフランス語の問題を挙げているのは、1933年10月2日の計量経済学会ライデン大会におけるプログラム上はフランス語で記載されたカレツキの報告がはたして何語で行われたかについて改めて疑問を呼び起こすが³¹、いずれにせよこれは口実である可能性が高い。と言うのは、この時点において、カレツキは別の有力な就職先候補の最終結果を待っていたからである。

それは、国立経済社会研究所³²ケンブリッジ研究計画

³⁰ Osiatyński (1991) には「カレツキの研究資金(彼が彼の『景気変動理論論文集』を完成させるための)が終了した後、1930年6月、彼は定職がなくなりロンドンに戻った」(p. 522)とあるが、正しくは1938年である。

³¹ 山本 (2020), 115-116頁を参照のこと。

³² Toporowski (2013) においては、例えば同じp. 125において、「National Institute of Economic and Social Research」と「National Institute for Economic and Social Research」と、表記のゆれが見られる。いずれかがトポロフスキによる誤植かとも思われたが、ケインズ・ペーパーズを実見された松本有一・元関西学院大学教授のご教示によると、時期によっていずれの表記も存在するとのことである。ただし、Toporowski (2013) における表記のゆれが、その時々典拠資料における表記のゆれを正確に反映したものであるかは疑問である。なお、同研究所のウェブサイト (<https://www.niesr.ac.uk/about-us>) には、本稿執筆時点で「National Institute of Economic and Social Research」とあり、また山本 (2021) 執筆時点で「1938年6月2日設立」とあったが、本稿執筆時点で「1938年設立」とのみある。1937年12月21日のカーンからスラッファ宛の手紙における「ホールの研究所」や1938年1月27日のカーンからケインズ宛の手紙における「経済研究の新しい部署」などの表現は、まだ正式には設立されておらず、名称も確定していなかったことによるものと思われる。

(Cambridge Research Scheme) であった³³。これは、ケンブリッジ大学のプロジェクトでもなければ経済学部のプロジェクトでもなく、ホールが所長を務める国立経済社会研究所のプロジェクトであったが、ケンブリッジに置かれ、将来的にはケンブリッジ大学経済学部の応用経済学科へと発展していくものであった (Toporowski (2013), p. 125)。

松本 (2021) によると、「ケインズは国立経済・社会研究所 (National Institute of Economic and Social Research) の設立に関してスタンプ卿 (Sir Josiah Stamp) から1937年3月18日付の書簡を受け取っていて、設立委員会のメンバーになることを承諾する返信を3月30日付で出している」(97頁)。そして、Toporowski (2013) によると、同研究所の資金がケンブリッジでの研究プロジェクトに分配される可能性について1938年5月22日にロバートソンがケインズに報告すると、同日ケインズはロバートソンに、「人事については、……チームについて私の考えでは、チャン [パーナウン]、オースティン [・ロビンソン]、デニソン、カレツキ及びストーンならよいチームになるだろう」との返信を書いている (p. 122, 中略及び [] 内は原文ママ)。このことから、後にケンブリッジ研究計画に結実する研究プロジェクトのメンバーとして、その可能性が持ち上がった時点からケインズはカレツキを候補の一人に考えていたことが分かる。

1938年7月14日のカーンからケインズ宛の手紙によると、ロートバス³⁴とカレツキの2人が候補に挙がっているところ、翌日の選考小委員会では何も決まらないだろうとの見通しが述べられている (Toporowski (2013), p. 123)。なお、同じ手紙においてカーンは、カレツキに決まらなかったとしてもプリンストン大学の可能性があるとして、リーフラーから何か聞いていないかケインズに尋ねている (同, p. 115)。また、同じ日にカーンは、ローザンヌ大学の件でマルシャクに手紙を書いている (同, p. 114)。よって、この時点ではあらゆる可能性が模索されて

いたことが伺われる。

同月15日のカレツキからロビンソン宛の手紙には、ロビンソンの論文へのコメントとともに、「私はまだ働いていません。まだ少し疲れています」「カレツキ夫人はなかなかよく眠れていません」とあり (Osiatyński (1990), p. 508), 就職活動に疲れている様子が伺われる。

同年8月4日のスラッフアからロビンソン宛の手紙においては、「カレツキは昨日ここにいましたが、とても物分かりがよく普段よりも「神経質」ではありませんでした。明日彼はフランスに行って10日間過ごし、それからポーランドに行って夏の残りを過ごします。彼は既にパスポートの更新を済ませており、10月に戻ってくるのに何の困難もないでしょう」(Osiatyński (1991), p. 522) として、最終決定はまだであるがカレツキにとって明るい見通しが示唆されている。

同月9日のオースティン・ロビンソン (これまで単に「ロビンソン」と表記してきたジョーン・ロビンソンの夫。以下、オースティン) からケインズ宛の手紙においては、選考委員会においてドップとスラッフアと自分の3人がカレツキを推し、チャンパーナウンはロートバスを推しているが、選考委員会が結論を下すのはほとんど不可能であると述べられている (Toporowski (2013), pp. 123-124)。同月10日のケインズからオースティン宛の手紙においては、カレツキを採用することが良い結果となることを希望すると伝えられた (松本 (2021), 97-98頁)。

同月27日のカレツキからカーン宛の手紙においては、「私のケンブリッジにおける仕事の見込みについて最終決定がなされるまで私たちはパリに滞在することに決めました」(Toporowski (2013), p. 122) とあり、ポーランドには行かずにパリで吉報を待つことにしたことが伺われる。

カレツキにとって幸運なことには、ロートバスは同年秋、統計学科で職を得ることとなった。よって、カレツキ

³³ 松本 (2021) は、「ここでケンブリッジ・リサーチ・スキームというのは、Cambridge Research Scheme of the National Institute of Economic and Social Researchのことであるが、マルクツツォはカレツキに職を与えるために (つまり経済的に援助するために) ケンブリッジ・リサーチ・スキームが設置されたと述べている。だがそうであろうか。ケンブリッジ・リサーチ・スキームの設立は、そもそもはカレツキとは関係なく、カレツキが得た職も最初からカレツキと決まっていたわけではない。それはケインズ・ペーパーズに遺されている関連文書 (ファイル: NIS) からわかる」(96-97頁) と、Marcuzzo (2012) における複数の記述を批判している。

³⁴ カタカナ表記は松本 (2021), 97頁による。カレツキによるロートバスの追悼文 (Kalecki (1944)) には、「私は1936年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで初めてロートバスに会った。我々はすぐに友人となり、経済動学についての一連の議論に携わることとなったが、我々はその議論をその後数年間続けた」(p. 121; *CWMMK*, VII, p. 322) などとある。なお、Kalecki (1944) が掲載された巻号について *CWMMK* 第7巻には「27/2」(p. 532 and p. 621) とあるが、正しくは Volume 12, Issue 2 のはずである。また、「Bibliography of Kalecki's Publications 1927-1987」(Osiatyński (1997d)) においては1945年に位置付けられているが (p. 621), 正確には1944年のはずである。

が唯一の候補者として残された (Toporowski (2013), p. 124)。同年9月6日にカレツキがローザンヌの椅子を断る手紙をカーンに送ったのは、そのような時期であった。

最終決定がいつどのような形でなされたかは定かでないが、1940年1月30日の「M・カレツキ氏の現在の地位に関する所長代理による覚書」との国立経済社会研究所理事会へのクローザーからの報告によると、「M・カレツキ氏は1938年10月初めにケンブリッジ研究グループの委員会 (the Committee of the Cambridge Research Group) によって統計担当 (their Statistician) として任命された。任期は1940年9月30日までである」などとある (Toporowski (2018), pp. 27-28)。

1938年12月28日のスラフファからロビンソン宛の手紙においては、カレツキが既に働いていること、カレツキもロートバスもスラフファのセミナーに出席していることが記されている (Osiatyński (1991), pp. 522-523)。1939年1月30日のカレツキからロビンソン宛の手紙においても、「私は今かなりハードに働いています」と記されている (同, p. 523)。

以上、いささか詳しく紹介してきたが、要するに1938年はカレツキにとって就職活動の時期であった。上記はあくまでも残されている記録に基づくものであり、上記以外にもカレツキは独自のルートで就職活動を繰り返していたのかも知れないが、それにしてもケインズ及びその側近のカーンらがカレツキの就職に向けて費やした手

間は並大抵のものではない³⁵。そして結局のところカレツキは、厳密にはケンブリッジ大学に属するものではないがケンブリッジにおいて職を得たのであり、しかも1938年の前半、カレツキの就職活動が全く見通しの立たなかった時期は、ケンブリッジ大学の研究資金で1939年論文集をまとめていたのであった。また、カレツキがケインズに校正刷を送った時期は定かではないが、ケインズが校正刷を読んだ感想をカレツキとロビンソンに伝えた1939年1月は、カレツキの就職活動が決着した直後の時期であった³⁶。

(5) 小括

本節におけるここまでの議論をまとめておこう。

カレツキ夫人及びロビンソンを情報源とするオシャティンスキ、ソーヤー及びファイウエルの証言によると、カレツキのケインズに対する先行性を認めてもらうためにKalecki (1939a) の序文または序論を執筆するようロビンソンとカーンがケインズに依頼する予定であった。また、カレツキを情報源とするファイウエルの証言によると、先行性の問題をケインズの前に持ち出すのはケインズの弟子たちに任されていた。一方、1939年1月のケインズからカレツキ及びロビンソン宛の手紙には、それぞれ、Kalecki (1939a) の校正刷を読んだ感想は書かれていたものの、序文の件については全く触れられておらず、カレツキ宛の手紙における誤植の指摘も出版には

³⁵ 本稿ではケインズらの尽力に焦点を当てるため、原則としてケインズらから送られた手紙の紹介に専念することとしたが、ケインズらから手紙を送られた側の対応についてはToporowski (2013) の該当頁の前後を参照のこと。

なお、ハリー・ジョンソンは「真偽のほどは不明であるが、もし本当だとすると皮肉な次のような話がある。それは、ケインズはそうしようと思えばカレツキのためにケンブリッジで職を世話してやることもできたのだが (以前はスラフファのために世話してやったことがある)、カレツキの性格があまりにも変わっていたために、ケンブリッジには取まらねるだろうと考えたせいだというのである」(Johnson and Johnson (1978); 邦訳, 193頁) と記しているが、たとえそのような話が当時のケンブリッジに伝えられていたとしても、事実は上記の通りである。

ところで、Toporowski (2018) 第11章の注31において「Johnson 'Cambridge in the 1950s' 1974, pp. 158-159」(p. 197) と出典が明記されているが、正しくは*The Shadow of Keynes: Understanding Keynes, Cambridge and Keynesian Economics* (Johnson and Johnson (1978)) のpp. 158-159である。なお、同様の文章が「The Shadow of Keynes」(Johnson (1977)) のp. 208にあるところ、トポロフスキが引用した文章に近いのはJohnson and Johnson (1978) の方である。ちなみに、Johnson (1977) はJohnson and Johnson (1978) の第11章として若干の修正とともに再録されているところ、同書第10章の初出はまさに1974年の「Cambridge in the 1950s」であり、かつ、第10章から第13章までから構成される同書第4部のタイトルが「Cambridge in the 1950s」となっている。要するに、トポロフスキは、Johnson and Johnson (1978) から引用を行ったにもかかわらず、あたかも初出から引用を行ったかのごとく見せかけようとして、取り違えてしまったのであろう。また、Toporowski (2018) 第12章の注2において「Johnson 'Cambridge in the 1950s' 1974」(p. 218) とページ番号抜きで出典が明記されている箇所も、初出としてはJohnson (1977), p. 208であるが、トポロフスキが引用した文章に近いのはJohnson and Johnson (1978), p. 159の方である。

³⁶ さらにこの時期には、ケインズの『一般理論』のカレツキによるポーランド語訳の計画も始まっていた。1938年7月、カレツキはポーランド経済統計学会に手紙を送り、計画を提案した。同年11月にカレツキは学会から翻訳の依頼を受け取った。カレツキがケインズに許可を求めたところ、同月23日にケインズは許可を与えた。カレツキは翻訳に取り掛かったが、完成することはなかった。どの時期まで翻訳に取り組んでいたかは不明であるが、カレツキが翻訳を行ったのは第18章までであった (Toporowski (2018), p. 2)。

反映されなかった。また、1936年9月の時点でロビンソンはカレツキの先行性を認めており、その認識はカーンにも伝えられていたところ、ケインズがKalecki (1939a)の校正刷を読んだと知ったロビンソンとカーンは、それが「先行性についてのデリケートな問題」を孕むことを認識していた。さらに、カレツキを情報源とするコヴァリクの証言によると、ロビンソン（とカーン）が先行性の問題をケインズの前に持ち出すとの約束を果たそうとしないので、カレツキが自分自身で行ったが、ケインズの反応は期待外れであった。これは、カレツキは自分自身では決して先行性の問題をケインズの前に持ち出さなかったとの、カレツキを情報源とするファイユェルの証言と一見矛盾する。

以上の証言は、次のように考えれば整合的に説明がつくのではないだろうか。カレツキのケインズに対する先行性を認めてもらうためにKalecki (1939a)の序文を執筆するようロビンソンらケインズの弟子たちがケインズに依頼する予定であったか、少なくともカレツキはそのように期待していたところ、時間だけが過ぎていったので、先行性について明示的に主張しないまま、カレツキは自らケインズに校正刷を送りつけた。それは、ケインズが校正刷を読みさえすれば先行性を認めるはずだとカレツキが期待したからである、と。

そこでKalecki (1939a)の内容を検討してみると、「既に事情に通じた読者でなければ意味をなさない」ものであるとは言え、確かに先行性を主張するものであった。

しかしながら、ケインズはカレツキの先行性を認めることはなかった。また、Kalecki (1939a)に対する当時の書評からも、カレツキによる先行性の主張は伝わっていなかった。ただし、書評の執筆者の一人であるランゲは、管見の限り第三者がカレツキの先行性を事実上認めた初めての印刷された文献を1939年にポーランド語で発表しており、なぜ1941年の英語の書評で先行性に触れなかったかはむしろ不可解である。

では、そもそもなぜこの時期、すなわち1938年前半に、カレツキは先行性の主張を封印する方針を転換して封印を解いたのであろうか。ロックフェラー財団による助成金での在外研究中の1936年11月に同僚の解雇に対する抗議のため母国ポーランドにおける職を辞したカレツキは、2度にわたる延長を経て1938年1月初めに助成金が切れたものの、1938年前半はちょうどケンブリッジ大学からの研究資

金を得てKalecki (1939a)をまとめる時期であった。のみならず、その後に向けての就職活動の時期であった。この間、ケインズ及びカーンを中心とするケインズの弟子たちはカレツキの就職のために大いに骨を折っていた。そして結局のところ、1938年10月にカレツキは国立経済社会研究所ケンブリッジ研究計画に就職したのであった。

以上が本節のこれまでのまとめである。では、結局のところ、なぜこの時期にカレツキは先行性の主張の封印を解いたのであろうか。

このことに関する証言は管見の限り見当たらない。よって以下は状況証拠に基づく推測に過ぎないが、就職活動に関してケインズの世話になっているからこそ、そのために先行性の主張を封印しているとは見られなくなかったということではないだろうか。先行性の主張を封印することによってカレツキは就職活動の面倒を見てもらうわけではないし、ケインズもまた、カレツキが先行性の主張を封印しているから就職活動の世話をしてやるわけでもない。そのようにお互いにとって道徳的に正しい道を歩むためにこそ、カレツキは先行性の主張の封印を解いたと解釈するのが、いささか深読みのし過ぎかも知れないが、カレツキの方針転換を整合的に説明できるのではないだろうか。

その上で、あるいはケインズは、「あれだけ世話をしてやったのに」と校正刷を読んで裏切られた思いをしたのかも知れず、そしてそれをおくびにも出さなかったのかも知れない。

以上、状況証拠に基づく推測に過ぎないが、そうであるからこそ長々と状況証拠を整理した次第である。

Ⅲ. 『経済変動理論論文集』 以後における先行性の主張

本節では、1939年論文集以後における先行性の主張について、カレツキ自身によるものと第三者によるものと合わせて整理するとともに、カレツキの後半生を概観する。

(1) ポーランド語版『貨幣賃金と実質賃金』

1939年、カレツキは、ポーランド労働・社会厚生省の求めに応じて『貨幣賃金と実質賃金』(Kalecki (1939b))をポーランド語で発表する³⁷。これは、上述の通り脚注において先行性の主張を復活させたところの1939年論文集の第3章「貨幣賃金と実質賃金」の主題を徹底的に論じたもの

³⁷ 正確な発表時期は不明であるが、クルズィヴィツキによる序文は1939年7月13日付であり(Osiatyński (1991), p. 519), それ以降と思われる。また、1939年1月30日のカレツキからロビンソン宛の手紙には、「私はまた、昨年の夏に引き受けた、ポーランド労働省のための仕事を終わらせなければなりません」とあり(Osiatyński (1991), pp. 517-518), 1938年から翌年にかけて執筆したものである。

とも言えるが、その序論は次のようなものである³⁸。

賃金の引下げは失業と戦う最も効果的な方法であるとの見解は極めて普及している。「賃金率は労働の価格であり、よってその価格が下がるとそれに対する需要は増加する」——そのような素朴な議論がしばしば似非経済学者によって提出されている。正統派経済学は、それよりはるかに洗練された理由付けを適用して、しかしながら、最終的には同様の結論に達している。ようやく最近になって、経済学における新しい潮流、すなわち賃金の問題に対するそのようなアプローチの有効性を否定する潮流が、浮上している。

本稿において、我々はまず貨幣賃金と実質賃金についての「古典派」理論を要約する。次に我々は賃金についてのケインズの理論、及び私自身がポーランドと外国で公表した理論の基礎の上にこれを批判する。我々の理論的探究の結果は次に1928-37年の期間のポーランドにおける賃金と雇用の変化の検討に用いられる。

我々は議論を可能な限り簡潔なものとするを目的とし、時として厳密性が犠牲にされよう。いくつかの詳細は最も本質的な相互依存関係を明確にするために無視される。

(Osiatyński (1991), p. 517)

ここでカレツキは、「賃金についてのケインズの理論」と「私自身がポーランドと外国で公表した理論」を併記し、両者の基礎の上に「古典派」理論を批判すると述べている。

そこでさらに詳しく見ていくと、「賃金についてのケインズの理論」には脚注が付けられており、CWMK第2巻には「See J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, London, Macmillan, 1936.」(p. 517)とある。また、「私自身がポーランドと外国で公表した理論」にも脚注が付けられており、同じく「See *Essay on the Business Cycle Theory and Essays in the Theory of Economic Fluctuations, Collected Works*, vol. i.」(同)とある。これらのうち、カレツキについての「*Collected Works*, vol. i」の部分は1939年に発行された時

点では存在するはずのない情報であり、明らかに編者のオシヤティンスキによって付加された情報である。

そこで *Dziela* を確認してみると、前者については「Zob. J. M. Keynes, *Ogólna teoria zatrudnienia, procentu i pieniądza*, Warszawa 1956.」, 後者については「*Próba teorii koniunktury, Dziela*, t. 1, Warszawa 1979; *Essays in the Theory of Economic Fluctuations*, New York-London 1939, New York 1972.」とある (*Dziela*, 2, s. 40)。ケインズについての「Warszawa 1956」やカレツキについての「*Dziela*, t. 1, Warszawa 1979」及び「New York 1972」との部分は1939年に発行された時点では存在するはずのない情報であり、これまた明らかに編者のオシヤティンスキによって改変または付加された情報である。

Kalecki (1939b) そのものは未だ実見できておらず、そこに *Próba teorii koniunktury* (Kalecki (1933a)) について「1933」との、1936年の『一般理論』に先立つ数字が明記されていたかは定かではないが、その他の脚注の付け方から判断して、まず間違いなく明記されていたものと思われる。また、ケインズについても、「1936」との数字がまず間違いなく明記されていたものと思われる。

仮に発行年の数字が明記されていなかったとしても、それは読者にとっていささか不親切であるということにとどまり、いずれにせよカレツキは、Kalecki (1939b) の序論において、「賃金についてのケインズの理論」に対して自身の先行性を主張していたと言えよう。

(2) オックスフォード大学統計研究所への移籍と「利潤の理論」及び『経済動学研究』

上述のように1939年10月からカレツキは国立経済社会研究所ケンブリッジ研究計画に勤務していたが、研究資金は国立経済社会研究所から提供されたところ、そのための監督委員会のメンバーは、ボウリー、ロビンス、ホール、ケインズ及びオースティンであった。研究グループのメンバーは、ケインズが議長、オースティンが事務局を担当し、それ以外にカーン、ロビンソン、スラッフア、チャンパーナウン及びカレツキであったところ、カレツキが統計担当として唯一の常勤メンバーであり、さらに研究生のテューとシューが助手であった。研究計画の当初のテーマは「1928年以降の連合王国における経済

³⁸ この序論は、Kalecki (1939b) が Kalecki (1962) に収録された際にはそのまま収録されたものの、Kalecki (1962) の英訳である Kalecki (1966) においては省略されている。Kalecki (1962) そのものは実見し得ていないものの、そのように判断する根拠は、*Dziela* 第2巻においてはこの序論は本文に収録されており、かつ、編注において、「本巻において、我々は1962年のポーランド語版に従ってテキストを提供する」(s. 557)とあるからである。CWMK第2巻においては英訳版を収録するとして出版社に謝意を呈した上で、この序論は編注に収録されている。よって、Kalecki (1966) の序論 (Robinson (1966)) を執筆したロビンソンは終生この序論の存在に気が付かなかったものと思われる。なお、CWMK第2巻刊行後であるにもかかわらず、Chapple (1996) においても Kalecki (1939b) の存在は見落とされている。

的变化の過程」の研究であった (Toporowski (2013), p. 125)³⁹。ただし、1938年9月22日のホールからケインズ宛の手紙を受けて、「1924年以降」に変更された (同, p. 126)⁴⁰。

カレツキは精力的に研究を進めたが、やがて批判が寄せられるようになる。1939年5月末のケインズからカーン宛の手紙においては、「前期末にあなたが送ってくれたカレツキからの資料に目を通したところです。白状しますと、かなり落胆しており、全く満足していません」などと伝えている (Toporowski (2013), p. 132)。

研究の進め方をめぐってカーンとカレツキとの間で話し合いが持たれたところ、同年6月9日、カレツキはカーン宛の手紙で、「昨日あなたが私に言われたことを慎重に検討した結果、私はケンブリッジに翌年も留まることは出来ないとの最終的な結論に達しました」(Marcuzzo (2020), p. 502; (2022), p. 16) などと述べている⁴¹。なお、1945年3月15日のカレツキからスラッファ宛の手紙には、「あなたの説得と取り計らいがなかったら、私は1939年にポーランドに向けて立ち去っていて、今日生きていることはなかったでしょう」(Toporowski (2018), p. 141) とあることから、1939年9月1日のドイツによるポーランド侵攻から始まる第2次世界大戦勃発までの時期にカレツキは本気で辞職と帰国を考えていたことが伺われる⁴²。

1940年1月8日のケインズからスラッファ宛の手紙には、国立経済社会研究所所長から経済戦争争に移ったホールのいるロンドンとハロッドのいるオックスフォードがカレツキの移籍先として候補に上っているとした上で、「もしもこれらの可能性が両方ともオープンになったらおそらく選択を行うのはカレツキ自身でしょう」と

しつつ、「オックスフォードがベターでしょう」とある (Toporowski (2018), p. 29)。

同年2月1日のケインズから国立経済社会研究所所長代理のクローザー宛の手紙には、2週間前にカレツキはオックスフォードへおそらくは移籍の提案を話し合うために呼ばれていたが延期になったなどがある (Toporowski (2018), pp. 29-30)。同月3日のクローザーからケインズ宛の手紙には、カレツキがどこで働こうと9月までは彼の給料を負担するよう理事会に尋ねてみるとある (同, p. 30)。同月5日の国立経済社会研究所運営理事会議事録 (The Minutes of the Council of Management of the National Institute of Economic and Social Research) (同, p. 28) によると、オックスフォード統計研究所 (Oxford Institute of Statistics) は1940年9月30日まで国立経済社会研究所が雇用期間中の費用を負担することを条件にカレツキを招聘することに同意し、国立経済社会研究所はこの責任を承認したとある (同, p. 31)。1940年9月30日は、国立経済社会研究所ケンブリッジ研究計画におけるカレツキの任期終了日である。同年2月26日のケインズからカレツキ宛の手紙には「オックスフォードでの計画が快適であなたの利益になることを祈っております」とあり、同年3月9日⁴³のカレツキの返信には「私はここでの私の仕事に極めて満足しています」とある (Osiatyński (1990), p. 570)。

このようにしてカレツキは1940年2月、国立経済社会研究所ケンブリッジ研究計画からオックスフォード大学統計研究所に移籍した⁴⁴。これは、ファイユエルが紹介するところの「抗議の辞職の連続」の2回目と言えよう。

先行性の問題と直接関係はないが、1941年1月末、カレ

³⁹ 松本 (2021) によると、「この研究所のもとでのケンブリッジ・グループの研究に関して、1938年9月20日の研究所理事会で次のように承認された」(97頁) とある。

⁴⁰ 実際、カレツキを中心とする研究グループの研究結果がToporowski (2013) 第13章第1節で紹介されているところ、そこで扱われている統計データの多くは1924年を起点としている (pp. 127-129)。

⁴¹ ここでマルクツツォは出典としてカーン・ペーパーズを挙げつつ「quoted in Toporowski 2013, p. 133」と記しているが、Toporowski (2013) よりも詳しい内容が含まれており、Toporowski (2013) からの孫引きではなく直接カーン・ペーパーズから引用していることが伺われる。

⁴² 1939年のいつのことかは定かでないが、同年、カレツキ夫人は短期間ポーランドを訪れ、カレツキの母親に最後に会ったとのことである (Toporowski (2018), p. 49)。

⁴³ オシヤティンスキによると、手紙には実際には「2月9日」とあるところ、カレツキによる誤りと判断されるとのことである (Osiatyński (1990), p. 570)。なお、Toporowski (2018) においてもOsiatyński (1990) から引用しつつケインズとカレツキとのやり取りが紹介されているが、カレツキによる返答の日付は明記されていない (p. 34)。

⁴⁴ 「1939年末、カレツキはオックスフォードに向かってケンブリッジを出発した」(Toporowski (2013), p. 138) とあるが、Toporowski (2018) に詳述されている上記の経緯より、1940年2月の誤りである。

なお、Osiatyński (1997c) には、「2月19日から彼はオックスフォード大学の統計研究所 (the Institute of Statistics of Oxford University) において研究フェローとして雇われた」とある (p. 591)。Worswick (1977) には、「ミハウ・カレツキは、1940年初めにオックスフォード大学統計研究所 (Oxford University Institute of Statistics) (そのように当時呼ばれていた) のスタッフに加わった」とある (p. 19, (Oxford University Institute of Statistics) は山本による原文併記だがその次の () 内は原文ママ)。また、Worswick (1977) が収録された号の *Oxford Bulletin of Economics and Statistics* の「EDITORIAL NOTE」には、

ツキはケインズに、後にKalecki (1941)として公表される原稿の『エコノミック・ジャーナル』への掲載を依頼する手紙を送っている。掲載をめぐってケインズはロビンソン及びカルドアと相談しており、同年2月4日のケインズからロビンソン宛、同日のロビンソンからケインズ宛、同月12日のケインズからロビンソン宛、同月14日のロビンソンからケインズ宛、同月18日のケインズからロビンソン宛、同月24日のロビンソンからケインズ宛、同年3月4日のケインズからロビンソン宛、同日のケインズからカルドア宛、同月6日のロビンソンからケインズ宛、同月9日のカルドアからケインズ宛、同月12日のケインズからロビンソン宛、同月13日のロビンソンからケインズ宛、そして同月18日のケインズからカルドア宛の手紙が残されており、3月9日のカルドアからケインズ宛を除いてケインズ全集第12巻 (Royal Economic Society (1983)) に収録されたほか (pp. 829-836)、3月9日のカルドアからケインズ宛を含めてCWMK第2巻の編注にも収録されている (pp. 530-536)⁴⁵。ここにおいてケインズは、「高度の、ほとんど精神錯乱のナンセンス (high, almost delirious nonsense)」(1941年2月4日のロビンソン宛, Osiatyński (1990), p. 530), 「途方もなく馬鹿げている (profound stupidity)」(同月12日のロビンソン宛, 同, p. 531), 「哀れなカレツキ (wretched Kalecki)」(同年3月12日のロビンソン宛, 同, p. 535) など、ほとんど人格攻撃と言ってよいほどの言葉遣いでカレツキの方法論を批判している。あるいは、オックスフォード大学統計研究所への移籍をめぐる感情的なしこりが後を引いているのであろうか。カレツキの原稿は結局、『エコノミック・ジャーナル』には掲載されず、『レビュー・オブ・エコノミック・スタディーズ』に掲載された。

1942年、ケインズが編集する『エコノミック・ジャーナル』に掲載された「利潤の理論」(Kalecki (1942))においてカレツキは、次のような脚注を付けている。

ここに提出された利潤の理論は、ケインズ氏の貯蓄と投資の理論と密接な関係にある。これは、しかしながら、私の「景気循環運動の理論」、『政治経済学雑誌』, 1935年3・4月及び「景気循環のマクロ動学理

論」, 『エコノメトリカ』, 1935年7月, において、ケインズ氏と独立に展開されていた。

(Kalecki (1942), p. 260⁴⁶)

もはや本文の紹介は省略するが、これは、有効需要の原理についての先行性の主張に他ならない。「ケインズ氏の貯蓄と投資の理論」が1936年の『一般理論』において展開されていたことは、改めて明記するまでもなかったであろう。1939年論文集においてはケインズの名前を出さずに内容からケインズの有効需要の原理との同等性を読み取らせた上で、カレツキがそれを展開していたのは1935年であったと記すことで暗に先行性を主張していたのであったが、ケインズの名前を出すことで先行性の主張はより明確になったと言えよう。

Kalecki (1942) が加筆の上収録された1943年の『経済動学研究』(Kalecki (1943))においては、上記の部分は次のような脚注となっている。

ここに提出された利潤の理論は、ケインズ卿の貯蓄と投資の理論と密接な関係にある。これは、しかしながら、私の「景気循環運動の理論」, 『政治経済学雑誌』, 1935年3・4月, 及び「景気循環のマクロ動学理論」, 『エコノメトリカ』, 1935年7月, において、ケインズ卿と独立に展開されていた。

(Kalecki (1943), p. 50; CWMK, II, p. 154)

すなわち、少なくともこの脚注部分に関しては、「ケインズ氏」が「ケインズ卿」となっていることとカレツキの2つの論文の間にコンマが1つ付加されている以外は一字一句同じである⁴⁷。なお、1942年6月、ケインズは男爵の爵位を授けられていた (Dostaler (2007); 邦訳, 608頁)。先行性の主張は維持され、かつ、より広い読者に読まれ得ることとなった。

ところで、Kalecki (1942) が『エコノミック・ジャーナル』に掲載されるに至るまでのカレツキとケインズとの手紙が残されており、ケインズ全集第12巻 (Royal Economic Society (1983)) に収録されたほか (pp. 837-841), CWMK第2巻の編注にも収録されている (pp. 542-

「The Oxford University Institute of Statistics was founded in 1935. It was renamed the Institute of Economics and Statistics in 1962 when its statutes were also somewhat changed.」とある。よって、当時の正式名称は「オックスフォード大学統計研究所 (Oxford University Institute of Statistics)」であろう。

⁴⁵ Osiatyński (1991) には、一連の手紙はケインズ全集の第11巻に収録されているとあるが (p. 530), 明らかに第12巻の誤りである。

⁴⁶ Kalecki (1942) そのものはCWMKには収録されておらず、それが加筆の上収録されたKalecki (1943) が第2巻に収録された上で、Kalecki (1942) との異同についてオシャティンスキによる編注が付けられている。

⁴⁷ CWMK第2巻においては、これらの異同についての編注は見当たらない。

546)⁴⁸。

1941年12月13日にカレッキがケインズに原稿を送ったことに端を発し、翌1942年1月2日にケインズが返信し、以下同月9日にカレッキ、同月10日にケインズ、同月15日にカレッキ、同月20日にケインズ、同月27日にカレッキ、そして同月28日にケインズがそれぞれ返信を行っており、計7通が残されている。応酬の要点は、カレッキの議論には特殊な仮定が隠されているはずでそれを明記すべきだとケインズが迫るのに対し、そのような仮定は置かれていないとカレッキが答える点にある。

しかしここで注目したいのは、ケインズに対する先行性を主張する上記の脚注に対し、一切言及が行われていないことである。ケインズは暗黙の同意を与えたと言えなくもないが、おそらくカレッキはケインズの何らかの言葉が欲しかったのではないか。そして、それが分かっているながらケインズは黙殺で答えたのではないか。いささか深読みのし過ぎかも知れないが、脚注において先行性の主張がなされたにもかかわらず、そして原稿に対して7通も手紙のやり取りが残されているにもかかわらず、先行性の主張に関して一切言及が行われていないことにこそ、本稿の主題からはこのやり取りの意義を見出したい。

ところで、1944年のズヴェイクによる『戦間期のポーランド 社会的・経済的变化の批判的研究』(Zweig (1944))の「付録 ポーランドの経済思想」には、1928年にワルシャワで景気循環・物価研究所が設立されたとの記述に続き、次のような注目すべき記述がある。

この研究所の共同研究者の一人であるM・カレッキは、1933年に彼の『景気循環理論』(後に『エコノメトリカ』(第2巻第2号)と『政治経済学評論』のために1934年に改訂され、オックスフォードで彼の『景気変動理論論文集』において新しいバージョンで出版された)を出版した。彼の理論はケインズの『雇用の一般理論』に極めて近づいた。

(Zweig (1944), p. 167)

ここには、エコノメトリカ論文が正しくは第3巻第3号に掲載されており、エコノメトリカ論文及びフランス語論文が正しくは1935年に公表されており、1939年論文集の出版地が正しくはロンドンである等、わずか数行に多くの誤りが含まれているが(ケインズの『雇用・利子および貨幣

の一般理論』を『雇用の一般理論』としたのは、今日では『一般理論』が一般的であるものの、略称として許容範囲であろう)、1933年のカレッキの理論が1936年のケインズの『一般理論』に「極めて近づいた」と評価しているのは注目に値する。ただし、あくまでもケインズを主体として、カレッキはわずかに及ばない、というニュアンスも感じられ、カレッキの先行性を認めたとまでは言い切れない。

では、なぜズヴェイクは、ともかくもカレッキをケインズと関連づけて評価し得たのであろうか。管見の限り、Zweig (1944) が紹介されたのはChapple (1996) が初めてであるが⁴⁹、その注釈には、「ズヴェイクは、かつてクラクフ大学の政治経済学教授であり、後に『経済理念 歴史的展望の研究』(1950) というタイトルの経済思想史を書くこととなった。彼の1944年のコメントにかかわらず、またケインズに関する24の参照を含んでいる一方、この本にはカレッキに関する参照は一切含まれておらず、ケインズの業績と関連づけてのカレッキに関する参照は一切行われていない。シュンペーターと同じく、冷戦、マッカーシズム及び当時の反共感情が参照の欠如に影響を与えたのかも知れない」(p. 49) とある。1950年の時点における参照の欠如はともかくとして1944年の時点でズヴェイクがカレッキを参照し得たのは、ランゲと同じくポーランド人であって、ポーランド語によるカレッキの『景気循環理論』や書評を実見したか、あるいはカレッキに言及したポーランド語文献(特に上述の1939年のランゲによる百科事典における「類似した」との記述)を実見したからと思われる。その上で、「極めて近づいた」との評価に留まったのは、理論内容を詳細に検討した上でそのような評価に留めたというよりも、概説的なZweig (1944) の性質上、例えば1939年論文集における「既に事情に通じた読者でなければ意味をなさない」先行性の主張を実見しても表面的にしか理解できず、無名のポーランド人が世界的な権威に先行したはずはないとの先入観もあいまって、ズヴェイクとしてはむしろポーランド人に対する身びいきの意図でもって「極めて近づいた」と評価したのかも知れない。

さて、オックスフォード大学統計研究所の所長には1940年7月31日に任命されてからボウリーがその任にあった(Toporowski (2018), p. 34)。1944年に彼が引退する際、カレッキ夫人の回想によると、カレッキは自分がその後任

⁴⁸ Osiatyński (1991) には、一連の手紙はケインズ全集の第11巻に収録されているとあるが (p. 542)、明らかに第12巻の誤りである。

⁴⁹ なお、Chapple (1996) の参考文献にある「*Poland Between the Wars*」(p. 54) とのタイトルは誤りである。副題は省略するとしても、正しくは「*Poland Between Two Wars*」である。

になるものと期待したものの、ボウリーは後任の候補者に心当たりがないかカレツキに推薦を求め、それを侮辱に感じたカレツキは辞職を決意した (Osiatyński (1997a), p. 483)。ただ、後任の実際の選考過程を見ると、所長が兼任する統計学講師としての能力と所長としての資金調達の手腕が期待されていたようである (Toporowski (2018), pp. 137-140)。とは言え、カレツキの主観的にはこれは、ファイエルが紹介するところの「抗議の辞職の連続」の3回目と言えよう。

カレツキは1945年2月に辞表を提出し、同年3月15日付で受理された (Toporowski (2018), pp. 140-141)。

(3) 国際労働機関・国際連合勤務と『経済動学理論』

1945年にモンリオールの国際労働機関 (ILO) に移ったカレツキは、1946年⁵⁰のポーランドへの一時帰国を経て、国際連合事務局からILOへの要請に応じる形で、1946年12月30日よりニューヨークの国際連合事務局に勤務することとなった⁵¹。

前後して1946年4月21日にケインズが亡くなっていたが (Dostaler (2007); 邦訳, 612頁)、ケインズに対するカレツキの先行性の認識に新たな動きが見られるようになる。

『エコノミック・ジャーナル』の1947年3月号に掲載されたケインズの追悼論文においてオースティンは、「しかしながら、たとえケインズが偉大であると主張するにしても、他の道をたどってまたは遅れてでも同じ目的地に我々がたどり着くことはなかったであろうと論じることは私は必要とは思わない。一人だけ他に名前を挙げるとすれば、ミハウ・カレツキが独立に同じゴールに近づいていたのである」 (Robinson, E. A. G. (1947), p. 42) と述べている。ただし、Zweig (1944) と同様、あくまでケインズを主体として、ケインズより先にはカレツキはゴールにたどり着いてはいなかったとの評価である。

では、なぜオースティンはこのような評価を行ったのであろうか。本稿の第Ⅱ節の(1)で検討したように、少なくともロビンソンとカーンの間では、そしておそらくはロビンソンの夫であるオースティンを含むケインズの弟子たちの間では、カレツキのケインズに対する先行性または少なくともカレツキがそれを主張していることは、周知の事実であったことが背景として挙げられる。その上で、ケ

インズの生前中はそれを公の場に持ち出すことは憚られたところ、ケインズが亡くなったことにより遠慮する必要がなくなったことが考えられる。その上で、「独立に同じゴールに近づいていたのである」との評価に留めたのは、やはりケインズの圧倒的な影響力に支配されていたか、あるいは追悼論文という性質上、死者といえどもケインズに対する礼儀を第一に考えていたからかも知れない。だが、上記のような評価であっても、ケインズを論じる以上はカレツキに触れざるを得ないとオースティンは考えていたとも言い得るであろう。

数年後、『ジャーナル・オブ・ポリティカル・エコノミー』の1951年10月号に掲載された、ハロッドの『ケインズ伝』(1951)の書評論文においてクラインは、次のような注目すべき見解を述べている。

過去数年間、なぜケインズの『一般理論』が専門家の興味を得るのにそんなにも成功したのか、そして同じ考えが他の源から独立に実際にやって来なかったのかどうか、疑問に思うようになった。理論的な水準において、完備した雇用の一般理論に関連した経済行動の孤立した局面に関するいくつかの考えを抱いていた人々もいた。しかし、全ての諸関係を一つのシステムにまとめ上げる洞察を持つ者はほとんど誰もいなかったようである。ケインズの人材のひらめきはまさにここにあった。最近、カレツキの景気循環理論を再検討してみて、その他の貢献に加えて、彼はケインズのシステムにおける重要なものを全て含んだシステムを実際に創り上げたとの結論に達した。カレツキは流動性選好と利率を全く扱っていないが、それでもケインズのものと同じ雇用理論を彼は持っていると感じている。カレツキの理論は雇用理論の革命的な言説に関係のない理由で注意を引くことが多く、彼は確かにケインズのような評判や世界的な注意を浴びる能力に欠けており、それゆえ彼の達成はあまり気付かれなかった。

カレツキのモデルが優れている点は、それが明示的に動学的であり、所得水準に加えて所得分配を考慮に入れており、そして投資注文と投資支出との重要な区別を行っていることである。カレツキのモデルが動学

⁵⁰ 山本 (2009) においては Osiatyński (1997c), p. 593 に基づき「1946年7月」(20頁)と記述していたところ、Toporowski (2018) には「1946年8月」(p. 160)とある。ただし、根拠が明記されておらず、Toporowski (2018) には誤りも多いことが判明しているので、7月か8月か判断を保留することとする。なお、戦後のカレツキの歩みについては、各種の伝記資料の記述がおおむね一致していることから、主に山本 (2009) 第1章第1節「カレツキの生涯」の記述を再利用しつつ、特に必要な場合を除いて出典を省略することとする。

⁵¹ 国際連合時代のカレツキについて詳しくは Dell (1977) 及び Osiatyński (1997b) を参照のこと。

的であることは直ちに注意を引いた。彼は失業均衡の問題や古典理論との対比に立ち入らなかったが、実際のところ、彼のモデルは安定解を達成する可能性についての古典派の考えと対照的であった。彼の消費関数は労働者の限界（及び平均）消費性向が1に等しくその他の人々の限界消費性向が0から1の間の値を取るものとして構築されている。もっと現実的な見解だと、労働者の限界性向は1より小さくその他の人々の限界性向より大きいということになるであろうが、これは洗練に過ぎない。

(Klein (1951), pp. 447-448)

ここでクラインは「カレツキの」の部分に脚注を付けて、1935年のエコノメトリカ論文を参照している。すなわち、1936年の『一般理論』に先立つ1935年においてカレツキは、「ケインズのシステムにおける重要なものを全て含んだシステムを実際に創り上げた」とクラインは主張しているのである。まさにこれこそが、管見の限り、第三者が明確にカレツキの先行性を認めた初めての印刷された英語文献である。

では、なぜクラインはこのような評価を行ったのであろうか。オースティンと異なり、アメリカ人であるクラインには、ケインズに付度する必要がなかったことが考えられよう。逆に、評価が1951年と遅れたのはなぜであろうか。これは、クラインが1947年に『ケインズ革命』(Klein (1947)) を著していたにもかかわらず、そこでは「事実において、ケインズ体系におけるあらゆる要素は、なにかのところに経済学の文献中のどこかで論ぜられていた。ところが、いまだかつて誰1人として、(1) 消費(貯蓄)性向、(2) 資本の限界効率、および(3) 流動性選好にもとづき、完結かつ決定的なモデルを1人で造りあげた理論家はいなかった」(邦訳、133頁)と述べていたことから問われなければならない。おそらく、1947年時点のクラインは単純にカレツキを知らなかったか、カレツキを読んでもその意味するところに気が付かなかったかどちらかであろう。アメリカ人であるクラインにとって、ケインズに付度する必要がなかった一方で、ケンブリッジにおける口伝の

ようなものも伝えられていなかったのであろう。そのようなクラインがカレツキのエコノメトリカ論文にたどり着いたきっかけを与えたのは、あるいはオースティンであったかも知れない。オースティンの追悼論文そのものにはエコノメトリカ論文についての言及は存在しないものの、カレツキの名前を目にしたクラインが、問題意識を持ってKalecki (1939a) またはKalecki (1943) を手に取りさえすれば、脚注における記述からエコノメトリカ論文にたどり着くのは容易であったことであろう。そして、いったんエコノメトリカ論文を熟読したクラインは、その意味するところを把握した以上、誰憚ることなくカレツキを評価することが出来たのであろう。そして、ハロッドの『ケインズ伝』は、その書評論文という形で、クラインに絶好の機会を与えたと考えられる⁵²。

オースティンとクラインに続いて、1952年にロビンソンは次のように述べている。

カレツキ氏がケインズと独立に一般理論を発見したことは、科学の同時発見の古典的な具体例であった。彼のバージョンの分析は(ケインズのバージョンはそうではなかったが)直ちに景気循環のモデルに導かれた。短期均衡の同じ概念に基づいて、彼の理論はケインズの枠組みに自然にあてはまり、そして一般理論のその後の発展においてその中に吸収されていった。今や、どちらから何を学んだか区別するのは不可能である。

(Robinson (1952), p. 159)

ロビンソンは、1936年にカレツキに会った当初から彼のケインズに対する先行性を認めていたが、ようやく1952年にそのことを活字にしたのであった。その背景として、ケインズの死及びオースティンとクラインによる露払いが指摘できよう。ただし、カレツキが「ケインズと独立に一般理論を発見」した日付または文献名が明記されていないため、「既に事情に通じた読者でなければ」先行性までは伝わらない表現となっている。

1954年、『経済動学の理論』(Kalecki (1954)) の第3章

⁵² なお、クラインは『ケインズ革命』の第2版(Klein (1966))において、Klein (1947)の上記の箇所に「これは、カレツキの先行する完結したモデルを考慮に入れるよう修正されなければならない。第8章を参照のこと」(p. 189)との注釈を追加した上で、Klein (1964a)を第8章として収録している。Klein (1964a)には、「カレツキの景気循環のモデルは、事実、単純モデルの本質的な成分をすべて展開していたし、そのうえそれは操作において動学的であった。カレツキの『エコノメトリカ』誌上の数学的論文は、ケインズの仰々しさにくらべてあまり注意を引きつけなかったが、しかし結局のところ、理論家は問題性を見抜いて、『一般理論』に先だつカレツキのモデルに、全幅的に当然の敬意を払うことであろう」(邦訳、264頁)とある。これは、Klein (1951)における「カレツキは流動性選好と利率を全く扱っていないが」との留保を外したさらなるカレツキの評価と言えよう。ちなみに、1965年の『ケインズ革命(新版)』との邦訳は、Klein (1966)の邦訳ではなく、あくまでもKlein (1947)の邦訳(の新訳)にKlein (1964a)の邦訳を「付章」として収録したものである。

「利潤の決定要因」の最初の節の「単純化されたモデルにおける利潤の理論」との節題に対してカレツキは、次のような脚注を付けている。

ここに与えられた利潤の理論は、私の「景気循環運動の理論」、『政治経済学雑誌』、1935年3・4月、及び「景気循環のマクロ動学理論」、『エコノメトリカ』、1935年7月、において、既に展開されていた。

(Kalecki (1954), p. 45; Osiatyński (1991), p. 567⁵³)

ここでは、ケインズとの関係についての明示的な言及がなく、ケインズに対する先行性の主張は控えめなものに後退している。同書第3章がKalecki (1943) 第3章に由来し、ひいてはKalecki (1942) に由来することからすれば、それらへの脚注と比較して後退は明らかである。

Kalecki (1943) と Kalecki (1954) の間には、Zweig (1944), Robinson, E. A. G. (1947), Klein (1951), そして Robinson (1952) がある。状況証拠に基づく推測に過ぎないが、ロビンソン夫妻が遅ればせながら「約束」を果たすに及んで、自らは先行性の主張を行わず、ケインズの弟子たち第三者に任せることに、カレツキは方針を再転換したのではないだろうか。その上で、ケインズの名前を出さずに自身の過去の業績に脚注で触れたのは、客観的事実の指摘に過ぎないとカレツキは考えたのではないだろうか。

一方、東西冷戦とマッカーシズムを背景に、国際連合事務局の職員でありながらカレツキはFBIの監視対象となり、さらに国際連合事務局におけるカレツキの職務と影響力が削減されようとするに及んで、カレツキは1954年10月1日に、1955年1月1日をもって辞職するとの辞表を提出した。これは、ファイウェルが紹介するところの「抗議の辞職の連続」の4回目と言えよう。

1955年1月20日、カレツキ夫妻はニューヨークの空港からロンドンに向けて飛び立ったが、そのこともFBIのファイルに記録されている (Toporowski (2018), p. 195 and p. 197)。

(4) ポーランドへの帰国から『資本主義経済動学論文選集1933-1970』まで

国際連合事務局を辞職してポーランドに帰国する途中、カレツキはイギリスに立ち寄っていくつかの講演を行う。1955年2月17日のT・C・チャン宛の手紙の中で、カレツキはケンブリッジで行った講演について、「彼らは紹介の際に

ケインズ以前の私の一般理論の発見について必ず強調してくれた」と記している (Toporowski (2013), p. 139)。

時期について明示することなくファイウェルは「公的な承認に対するカレツキの反応は、以下の出来事からわずかに伺えるが、それはドップから私に伝えられたものである。ケンブリッジでの戦後の講演の一つの間、カレツキはギルポーによって紹介されたが、ギルポーは、実のところカレツキは一般理論の主要なアイデアに先行しており、それゆえそれはカレツキ革命と呼ばれてもよかったかも知れないと認めた。カレツキは、そのような機会には何も言わなかったものだが、このことではっきりと喜んだように見えた」(Feiweil (1975), pp.457-458) と記しているが、このエピソードは、おそらくこの時期のことであろう。ケインズの死後、少なくともケンブリッジにおいては、カレツキのケインズに対する先行性は口頭レベルでは公然のものとなっており、そしてカレツキもまんざらではなかったことが伺われる。

1955年2月にポーランドに帰国後、同年4月1日に副首相のミンツの首席顧問⁵⁴に任命されたのを皮切りに、1957年1月15日には計画委員会理事会理事に任命され、同月30日には経済審議会の副議長に任命されるなど、カレツキは社会主義計画経済の実践に関する多くの公職に就くこととなる。また、1955年12月1日からポーランド科学アカデミーの経済学研究所に勤めていたところ、1956年6月28日には中央資格審査委員会から経済学教授の称号を授与され、同年7月1日に経済学研究所教授に任命されるなど、教育にも従事することとなる。

1958年の2月から3月にかけて、カレツキは計画審議会が派遣する視察団の一員としてイギリスに2週間滞在する。その際、『オブザーバー』紙の同年3月2日の記事に次のような記述が見られた。

彼 [山本注：カレツキ] が30年代にケンブリッジに到着したとき、彼自身の経済理論に関するポーランド語の原稿をいくつか携えていたが、彼のアイデアの多くが革命的な本『雇用・利子および貨幣の一般理論』においてケインズによってちょうど到達されていたことを発見して彼は打ち砕かれた。彼は、彼自身の努力について、これ以上何も語るまいと決心した。

(Osiatyński (1992), p. 331)

同紙がどのような取材に基づいて記事を執筆したかは不

⁵³ CWMK第2巻においては、1965年の第2版を底本にするとして、本文にはこの脚注は見当たらず、オシャティンスキによる編注において1954年版における脚注として紹介されている。

⁵⁴ 山本 (2009) においては「首席顧問」(22頁) としていたが、正しくは「首席顧問」と訳すべきであった。

明であるが、1955年のエピソードからも分かるように、例えばケンブリッジの関係者に取材すればすぐにこのような話が出てくるほど、関係者の間でカレツキのケインズに対する先行性は公然のものとなっていたとも言えよう。あるいは、情報源はカレツキ自身であったのかも知れない。

ところで、ルベスは、アソウスとの共著によるカレツキに関する入門書 (López and Assous (2010)) において、次のように回想している。

我々の一人 (JL) はカレツキにかつて、なぜ彼はブルム実験に関する彼の論文を、彼がポーランドで出版した資本主義経済に関する論文集の中に含めなかったのかと尋ねた。彼の答えは次のようなものであった。「ほら、その論文で私は、私の分析はケインズの理論に基づいていると述べていますが、実際のところ、私は私自身の理論を応用していたのですよ」。このことは、ケインズとの、そしてケインズの理論との、彼の難しい関係を大いに物語っている。

(López and Assous (2010, p. 227, ()内は原文ママ)

ここで「彼がポーランドで出版した資本主義経済に関する論文集」とあるのは、Kalecki (1962) のことであろう。ここには、ブルム実験に関するKalecki (1938a) において、「我々の研究は、孤立体系における賃金上昇は物価を同じ割合で変化させ、そして産出に影響を与えない傾向があるというケインズ理論の経験的実証と見なされよう」(p. 40; *CWMK*, I, p. 340, 傍点は山本) などと述べていたことへの後悔の念が滲み出ている。

一方、ポーランドにおける社会主義計画経済の実践にあたっては、概してカレツキの意見は顧みられなかった。次第に要職から外されていく中、1963年12月31日には計画委員会は一切の役職から退く辞表を提出する。表向き理由は学究活動に専念したいからとのことであったが、実際の理由は5か年計画の作成にあたって彼の意見が無視されたからであった。これは、ファイウェルが紹介するところの「抗議の辞職の連続」の5回目と言えよう。

1964年、カレツキの65歳の誕生日を記念して『経済動学と経済計画の諸問題 ミハウ・カレツキ記念論文集』(Polish Scientific Publishers (ed.) (1964)) が出版される。

同書に収録された「ミハウ・カレツキの伝記」(Kowalik (1964)) は言わばカレツキ公認の伝記であるが、以下のような記述が見られる。

1935年⁵⁵、ジョン・メイナード・ケインズは彼の『雇用・利子および貨幣の一般理論』を出版したが、その当時までアカデミックな経済学に特有であった自分の頭を砂の中に隠すという伝統的な態度からきっぱりと別れ、不況、大量失業及び資本主義経済における均衡の維持の困難の存在といった事実を彼の考察の出発点とした。……資本主義経済におけるいくつかの基本問題に対するケインズのアプローチは急速に彼に尋常ならざる名声をもたらし、このことは結果としてカレツキのアイデアに対する態度にいくらかの影響を与えた。ケインズ (現代的な手法の助けを借りる資本主義の医者) とカレツキ (資本主義に対する確信的批判者) の態度と結論における基本的な相違点にかかわらず、いくつかの概念の類似点に対する注意が払われるようになった。これが、ケインズの弟子かつ解釈者としてのカレツキの矛盾をはらみかつおそらくは他に例のない国際的な経歴の始まりである。ケインズ自身は彼をそのように扱っていたが、それは全くの善意からで、と言うのは、彼の生涯の最後に至るまで彼は彼の『一般理論』以前に公表されたカレツキの業績を何も聞いていなかったからである。

(Kowalik (1964), pp. 3-4)

そしてコヴァリクは脚注においてRobinson, E. A. G. (1947) 及びKlein (1951) を紹介している。「彼の生涯の最後に至るまで彼は彼の『一般理論』以前に公表されたカレツキの業績を何も聞いていなかった」との記述は、本稿第I節(1)の末尾部分で紹介した、カレツキの先行性についてケインズに伝えることはケインズの弟子に委ねられていたところカレツキが自分で行ったとの、他ならぬコヴァリク自身が1964年にカレツキに聞いたとの証言と一見矛盾する。本稿において先述したように、カレツキが行ったことは1939年論文集の校正刷を送りつけたことに過ぎないと考えれば必ずしも矛盾しないが、Kalecki (1954) における「方針再転換」を踏まえれば、その延長線上にあって、カレツキ自身が先行性の主張を行ったまたは行おうとしたことにはなるべく触れず、Robinson, E. A. G. (1947) 及びKlein (1951) を持ち出して第三者の口から先行性について読者に伝えさせようとしているとも見なせよう。

記念論文集にはクラインの「社会主義経済学における計量経済学の役割」(Klein (1964b)) も収録されている。その中でクラインは次のように述べている。

⁵⁵ 明らかに1936年の間違いである。

マルクスの再生産と蓄積の表式とケインズの有効需要のモデルは、現在の理論モデル構築の先駆者である。カレツキのモデルは、マルクスの精神で構築されているものの、それが西側の経済学者の現在の世代の間でよく知られるようになったケインズのシステムの全ての本質的な成分をいかに実際には前もって示しているかは、しばしば適切に評価されていない。計量経済学部門におけるマクロ経済モデル構築の近年の急速な発展はネオ・ケインジアン発展の成果であると通常は思われている。実際には、今日存在するほとんどのモデルは、カレツキ、カルドア、メツラー、及びグッドウインのモデルにおいて最初に見出されたアイデアに分解できよう。最後の3つのモデルはカレツキ理論の自然な延長として発展させられたであろう。ランゲとヒックスによるケインズの数学的解釈は疑いなく発展を強化し確かにそれを増強したが、ケインジアン発展の基本的な成分は既にカレツキのモデルにおいて利用可能であったのである。

(Klein (1964b), p. 189)

そして、論文を次のように締めくくっている。

生産調整と在庫行動の理論はその他の著者の文献の中で遅れて登場した。現代の計量経済システムの全ての基本的な成分がカレツキのモデルに由来するとまでは言うべきでないにしても、カレツキのモデルの全ての構成要素は現代の計量経済モデルにおいて戦略的な場所を見出すとは言えよう。1930年代初期における彼の理論は、現代の発展に照らしてみれば、知的な偉業と言えよう。

(Klein (1964b), p. 191)

これは、Klein (1951) における主張を計量経済学の分野にも敷衍したものであり、かつ、Klein (1964a) における主張とも整合的と言えよう。

記念論文集にはロビンソンの「カレツキとケインズ」(Robinson (1964)) も収録されている。その中でロビンソンは次のように述べている。

『雇用・利子および貨幣の一般理論』は1936年1月に出版された。

その間、いずれにせよいかなる接触もなく、ミハ

ウ・カレツキは同じ解決を見出した。

1933年にポーランド語で出版された彼の本『景気循環理論論文集』⁵⁶は数学的形式において有効需要の原理を明瞭に述べている。……

(中略)

公表の先行性に関するミハウ・カレツキの主張は論争の余地がない。しかるべき学者の尊厳とともに（もっとも、これは残念ながら学者の間ではむしろ稀なことであるが）彼は決してこの事実に言及しなかった。そして、実際のところ、関係する執筆者を除いて、誰が最初に印刷に回したかを知ることは特に興味深いことではない。興味深いことは、2人の思想家が、全く異なった政治的・知的出発点から、同じ結論に達したことである。ケンブリッジの我々にとってこのことは大いなる慰めであった。全くの誤解に取り囲まれて、狂っているのは我々かそれとも彼らかとあやうく疑い始めた時期があった。まじめな科学において、独創的な業績とは発見——常にそこにあり、見出されることを待っている関連をつかまえること——である。このことが経済学において起こり得たことは、我々が発見していたことは確かにそこにあったことを再確認させてくれた。

私はミハウ・カレツキとの最初の出会いをよく覚えている。我々の真新しい理論を既に熟知しているだけでなく、我々の内輪の冗談のいくつかを作り出してすらいいた奇妙な訪問者であった。それは一種のピランデッロのような感情をもたらした。話をしているのは彼なのか私なのか？ 1935年の彼の論文（今や初めて英語で利用できる）を読むと、同じ感情がもたらされる。何度にもわたって、あの頃、私は、集中力には欠けていたが、ケインズの理論を平易な言葉で説明しようとするまさにそのような論文を執筆していた。

(Robinson (1964), pp. 336-338, 傍点の原文はイタリック体)

ただし、ファイエルも引用していたように、ロビンソンは次のようにも付け加えていた。「それにもかかわらず、ミハウ・カレツキが最初に認めたように、西側のアカデミックな経済学における「ケインズ革命」は、そのように呼ばれるのが正しい。と言うのは、ケインズの広範な視野、きらめく論争の才、そして何よりも、彼がその中で生まれた正統派の砦における彼の地位なしには、反啓蒙主義の壁

⁵⁶ ロビンソンの原文には「*Essays in the Theory of Business Cycle*」とあるが、これはCWMK第1巻に「*Essay on the Business Cycle Theory*」として収録されているものに相当する。なお、ロビンソンが序論 (INTRODUCTION) (Robinson (1966)) を執筆することとなるKalecki (1966) の序文 (FOREWORD) には「*An Essay on the Theory of Business Cycle*」(p. 1) とある。

を打破するにはずっと長い時間がかかったであろうからである」(Robinson (1964), p. 339)。

1965年6月、メキシコで開催されたラテンアメリカ経済学部会議⁵⁷の際、カレツキとロビンソンは再会している。同月9日のロビンソンからカーン宛の手紙には、「カレツキはこれまでになく狂暴に現れました。彼は明らかに記念論文集の私の一節が気に障っており、それで私はしばらくの間彼の本を褒めることにします」(Toporowski (2018), p. 239) とある。「公表の先行性に関するミハウ・カレツキの主張は論争の余地がない」とまで評価しているのにカレツキが気に障ったのは、おそらく「ミハウ・カレツキが最初に認めたように、西側のアカデミックな経済学における「ケインズ革命」は、そのように呼ばれるのが正しい」とのくだりであろう。あるいは、ギルポーのように「カレツキ革命と呼ばれてもよかったかも知れない」と書いておけばよかったかも知れない。

1966年、Kalecki (1962) の英訳として『景気循環理論研究1933-1939』(Kalecki (1966)) が出版される。その表紙カバー折り返し部分は次のようなものである。

1936年にケインズは『雇用・利子および貨幣の一般理論』を出版したが、その中で彼の貨幣理論と賃金理論そしてカーンの乗数は一貫した、そして革命的なシステムとして機能することとなった。その間、そして全く独立に、ミハウ・カレツキは同じ解決を見出した。1933年にポーランド語で出版された、彼の本『景気循環理論研究』⁵⁸は、ようやく英語版が登場したが、数学的形式において有効需要の原理を明瞭に述べている。
(中略)

公表の先行性に関するミハウ・カレツキの主張は論争の余地がないが、しかしながら、関係する執筆者を除いて、誰が最初に印刷に回したかを知ることは特に興味深いことではない。興味深いことは、2人の思想家

が、全く異なった政治的・知的出発点から、同じ結論に達したことである。まじめな科学において、独創的な業績とは発見——常にそこにあり、見出されることを待っている関連をつかまえること——である。このことが経済学において起こり得たことは、彼らが発見していたことは確かにそこにあったことを英国で1930年代に偶像破壊を行った理論家に再確認させてくれた。

(Kalecki (1966), 表紙カバー折り返し部分, 傍点の原文はイタリック体)

一見して明らかのように、Robinson (1964) とほとんど同じである⁵⁹。ただし、Robinson (1964) においては「我々」となっていた箇所が「彼ら」に変更されるとともに、「彼ら」がどういった人々なのかについての説明が加わるなどしている。

この表紙カバー折り返し部分はおそらくロビンソンの承諾を得た上で出版社が執筆したものであろうが、カレツキの意向も反映されていると考えるのが自然であろう。ここで注目すべきは「ようやく英語版が登場したが」との表現で、英語圏の読者に対してカレツキのケインズに対する先行性の証拠を提出することがこの英語版の出版の目的の一つと言えよう。

そのことが改めて表明されているのがロビンソンによる序論 (Robinson (1966)) における「本巻の英語での出版は、科学的発見の偉大な偶然の一致の最も著しいものの一つの証拠を提供する」(p. xii) との表現であろう。

ただし、Kalecki (1966) の出版そのものが英語圏の読者に対するカレツキのケインズに対する先行性の主張であるとは十二分に言いうるにしても、カレツキ自身の口からは同書内において明示的に語られてはいない。カレツキ自身による序文には、自己の理論が1933年にまで遡り得るとの指摘はあっても、「ケインズ」の名前は一切登場しない⁶⁰。

⁵⁷ 山本 (2009) においては Osiatyński (1993) における「the Reunion of Latin American Schools of Economics」(pp. 204, 208-209) との記述に基づき、「reunion」を英和辞典で引いた上で、いささか違和感を覚えつつ、「ラテンアメリカ経済学部同窓会」(80頁) としていた。しかしながら、この「Reunion」とは英語ではなくスペイン語の「reunión」のことではないかと思いついた。実際、Toporowski (2018) には「a congress of Latin American university departments of economics」(p. 239) とある。おそらくオシャティンスキが目にした資料には会議名がスペイン語で書かれていたのであろう。そして、「reunion」という英単語が存在することから、スペイン語の「reunión」を英語の「congress」等に翻訳することなく、他のスペイン語を英語に翻訳した結果、「the Reunion of Latin American Schools of Economics」となってしまったのではないだろうか。

⁵⁸ 脚注56と照らし合わせると、機械的な処理がいささか不整合を来している。表紙カバー折り返し部分の原文には「*Studies in the Theory of Business Cycles*」とあり、これは「*Studies in the Theory of Business Cycles 1933-1939*」との本書のタイトルに合わせたものと思われるが、1933年にポーランド語で出版された本は、本書の序文 (FOREWORD) には「*An Essay on the Theory of Business Cycle*」とある。

⁵⁹ 日本語としての不自然さを厭わず、コンマの有無も含め、細かな表現の違いも訳し分けるよう心掛けた。

⁶⁰ むしろ、Kalecki (1954) に対して「これらの私の理論とローザ・ルクセンブルクの理論との間にある種の類似性があることは注目に値する」(Kalecki (1966), p. 1) と、ルクセンブルクの名前が挙げられている。

また、『一般理論』が出版された1936年より以前に公表された論文に対して、これこれの命題は『一般理論』において述べられたものと同じである云々といった注釈が付け加えられてもいない。のみならず、1939年に公表され、本節(1)においても紹介したようにカレッキ自身の序論においてケインズに対する先行性を主張していたKalecki (1939b)の収録にあたっては、英語版において序論がわざわざ削除されているのである⁶¹。すなわち、カレッキ自身の口から先行性を主張することが意図的かつ徹底的に避けられているわけであるが、これは、ケインズに対する先行性の主張は第三者に任せるとのKalecki (1954)以来の方針再転換の徹底と言えよう。

さて、カレッキはポーランドにあってもアカデミズムの世界においては比較的自由に活動を続けていたが、1968年3月のゴムウカ政権による弾圧の後、厳しい批判にさらされることとなる。当時、反政府的であると見なされた研究者や多くのユダヤ人学生が大学から追放され、カレッキの同僚や弟子の多くも犠牲となった。カレッキ自身も同年5月に査問会議に巻き込まれたものの、世界的名声のために職を追われることはなかった。しかしながら、これらの出来事に抗議してカレッキは同年10月8日、当時勤務していた計画統計中央学校を定年の1年前の日付である同年9月30日から離れるとの辞表を提出する(Osiatyński (1997c), p. 604)。これは、ファイウエルが紹介するところの「抗議の辞職の連続」の6回目かつ最後と言えよう。

1971年、図らずもカレッキの死後に出版されることとなる論文集(Kalecki (1971))の序文において、カレッキは次のように記している。ただし、正確な日付は不明ながら執筆時点に着目し、時系列としてはカレッキの死の前に位置付ける。

第1部は、ケインズの『一般理論』が現れる前の1933年、1934年⁶²、そして1935年にポーランド語で公表され、そしてその本質を含んでいると私が信じる3

本の論文が含まれている(英訳は、『景気循環理論研究 1933-1939』、ベイシル・ブラックウェル、オックスフォード、1967年⁶³、において初めて公表された)。それに加え、この部において読者は、1937年の『エコノミック・ジャーナル』において公表された商品税、所得税及び資本税に関する短い論文を見出すであろう。

(Kalecki (1971), p. vii)

これは、「ケインズの『一般理論』が現れる前の」「その本質を含んでいると私が信じる」と明記している点において、これまでに見た中で最も強い表現の先行性の主張である。ここに至ってカレッキは、Kalecki (1954)以来の方針を再々転換し、再び自分の口からケインズに対する先行性を主張するようになったと言えよう。

ちなみに、「1937年の『エコノミック・ジャーナル』において公表された商品税、所得税及び資本税に関する短い論文」としてKalecki (1937b)が収録されているところ、同論文はもともと「ケインズ氏の理論は、我々が課税の問題を探求するにあたり新しい基礎を提供している。様々なタイプの税が有効需要に与える影響の分析は、我々が見るように、極めて予期せぬ結果に導き、それは実際の重要性も有するであろう」(p. 444)という段落から始まっていたが、この段落は丸ごと削除されている⁶⁴。これは、緒方(1995)が言うように、「この論文が1937年に発表されたにも関わらず、ケインズ『一般理論』の単純な応用ではなく、カレッキ自身の「一般理論」の着想からの応用であることを強調しようとしたように思われる」(164頁)。

「1970年4月17日、彼は発作に襲われて翌日死亡した」(Toporowski (2018), p. 260)⁶⁵。

Kalecki (1971)に対する書評において、ロビンソンは次のように述べている。

1936年にミハウ・カレッキはワルシャワで勤めてい

⁶¹ 脚注38を参照のこと。

⁶² ここで1934年にポーランド語で公表されたとして念頭に置かれているのは第2章として収録されているKalecki (1933b)であるが、1934年公表というのはおそらくカレッキの思い違いによるものと思われる。

⁶³ 正しくは1966年のはずである。

⁶⁴ CWMK第1巻においては、Kalecki (1971)収録版を底本としたことにより、この部分は本文には収録されておらず、オシャティンスキによる編注(Osiatyński (1990), p. 562)において読むことが出来る。なお、Kalecki (1971)収録版においてはタイトルが「A Theory of Commodity, Income and Capital Taxation」と「Income」の後の「,」が削除されていたが、CWMK第1巻においては「A Theory of Commodity, Income, and Capital Taxation」とKalecki (1937b)の元に戻っている。

⁶⁵ 山本(2009)、24頁のみならず、従来のほとんどの文献はカレッキの死亡日を1970年4月17日と記しているが、このように明確に書かれている以上、おそらく正確な死亡日は1970年4月18日なのであろう。このことを反映してか、Osiatyński (2020)のタイトルは「Remembering Kalecki: 22/05/1899-18/04/1970」となっている。ただし、カレッキの誕生日は1899年6月22日のはずである。

た研究所から1年間の休暇を取り、雇用の一般理論を書くために外国に行った。彼は既に、後にケインズ理論として知られるものの主要なポイントの概略であるいくつかの論文をポーランド語で公表しており（その最初は1933年である）、また誰も読まなかったフランス語の論文と誰も理解できなかった数学的論文を公表していた。

彼がストックホルムにいた時、ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』が現れた。彼はそれを手に入れて彼が書こうと思っていた本を読み始めた。彼が私的な会話で告白したことには、これは居心地の悪い経験であったとのことであったが、彼は公表の先行性に公に言及したことは決してなかった（例外として彼の最初の英語の本の1つの脚注があるが、それは既に事情に通じた読者でなければ意味をなさないものであった）。彼の死の直前に至って初めて、その他の人々が彼の代わりにその主張を公に行ったのはその後になって、ようやく彼はこの本の序文にそのことに簡潔に言及したのである。

(Robinson (1971), p. 1)

(5) 小括

本節におけるここまでの議論をまとめておこう。

Kalecki (1939a) において先行性の主張の封印を解いたカレッキは、同年、ポーランド語による Kalecki (1939b) においてもケインズに対する先行性の主張を行っていた。

研究の進め方をめぐってケインズらから批判を受けたカレッキは1940年2月にオックスフォード大学統計研究所に移籍したが、Kalecki (1942) 及び Kalecki (1943) においても、Kalecki (1939a) よりも表現を強める形で先行性の主張を行っていた。なお、ケインズが編集を行っていた『エコノミック・ジャーナル』への Kalecki (1942) の掲載をめぐってカレッキとケインズとの間に7通の手紙のやりとりが残されているところ、先行性の主張の部分に関しては一切言及が行われていないことがむしろ注目される。

1945年にモンリオールのILOに移ったカレッキは、1946年のポーランドへの一時帰国を経て、同年末よりニューヨークの国際連合に勤務することとなった。

前後して同年4月にケインズが亡くなっていたところ、1947年にオースティンはケインズの追悼論文において「カレッキが独立に同じゴールに近づいていた」と記した。これは、文言としてはカレッキの先行性を認めたものではないが、ロビンソンの夫でもあるオースティンはもともとカ

レッキの先行性を認めていたか少なくともカレッキがそのように主張していることを認識していたはずのところ、このような表現に留まったのはケインズの追悼論文であるという事情によるとともに、このような表現であれケインズの弟子として初めて印刷された文献においてカレッキとケインズとの関係に言及し得たのはケインズの死後であるという事情によるものと考えられる。

1951年にクラインはハロッドの『ケインズ伝』の書評論文において、印刷された英語文献において初めて明確にカレッキの先行性を認めた⁶⁶。クラインがそれをなしたのはアメリカ人としてケインズに忖度する必要がなかったこともあるが、1947年にクラインが『ケインズ革命』を著していた時点ではカレッキの先行性に気付いていなかったことから、同年のオースティンの追悼論文が Kalecki (1935b) を本格的に検討するきっかけをクラインに与えた可能性がある。

1952年には、先行性までは明記されていないものの、「独立に」「同時発見」との表現を用いて、ついにロビンソンがカレッキとケインズの関係について活字化した。その背景として、ケインズの死及びオースティンとクラインによる露払いが指摘できよう。

1954年、カレッキは Kalecki (1954) において、Kalecki (1942) 及び Kalecki (1943) と同様、そこで述べられた理論が Kalecki (1935a) 及び Kalecki (1935b) において既に展開されていたと脚注を付けながら、Kalecki (1942) 及び Kalecki (1943) と異なり、ケインズの名前は出さなかった。これは、ケインズの『一般理論』が1936年に出版されたのは周知の事実であるところ、事実上の先行性の主張ではあるものの、表現が後退したと言える。その理由として、状況証拠に基づく推測に過ぎないが、オースティンやクラインやロビンソンの発言を受けて、ケインズに対する先行性について自らは明示的には主張せず、第三者に任せると方針の再転換を図ったことが考えられる。

1955年1月に国際連合を辞職したカレッキはポーランドへの帰国途中にイギリスに立ち寄ったが、そこでの講演の際に先行性について紹介してもらえてまんざらでもなかった様子が伺える。

1964年にはカレッキの65歳の誕生日を記念しての論文集が発行されたが、その中でカレッキ公認の伝記を執筆したコヴァリクと、クライン及びロビンソンがカレッキの先行性を主張している。しかしながら、「公表の先行性に関するミハウ・カレッキの主張は論争の余地がない」とまで記したロビンソンに対し、おそらくは「『ケインズ革命』は、

⁶⁶ なお、Phelps Brown (1937) において紹介されるフリッシュの発言や Schumpeter (1939)、そして Zweig (1944) は、カレッキとケインズとの関係についての言及はあるものの、カレッキの先行性を認めたとまでは言えない。

そのように呼ばれるのが正しい」と記したことを理由にその後怒りを露にするなど、カレッキは大人げない反応も見せている。また、自ら活字にはしないまでも、周囲の人々に折に触れてケインズとの因縁について語ってもいた。

1933年から1939年にかけてのカレッキのポーランド語文献の英訳であるKalecki (1966) はカレッキのケインズに対する先行性の証拠を提供することが目的の一つと思われるが⁶⁷、カレッキ自身の序文においてはケインズの名前は一切登場せず、また収録文献に対して新たな注釈が付け加えられてもいない。のみならず、収録文献からケインズに対する先行性について触れた部分が削除されている。一方で、先行性について明記したロビンソンの序論を収録し、また表紙カバー折り返し部分には先行性について明記されている。これらは、ケインズに対する先行性の主張は第三者に任せるとのKalecki (1954) 以来の方針の再転換の徹底と言えよう。

だが、1968年に定年を前にして、筆者の計算では6回目の抗議の辞職を行ったカレッキは、結果的に死後出版されることとなるKalecki (1971) において、「第1部は、ケインズの『一般理論』が現れる前……にポーランド語で公表され、そしてその本質を含んでいると私が信じる3本の論文が含まれている」との、これまでで最も強い表現で先行性の主張を行っていた。これは方針の再々転換であったが、最後に一言、自分の言葉で言っておきたかったのであろう。

Kalecki (1971) に対する書評においてロビンソンは、「……彼は公表の先行性に公に言及したことは決してなかった（例外として彼の最初の英語の本の1つの脚注があるが、それは既に事情に通じた読者でなければ意味をなさないものであった）。彼の死の直前に至って初めて、その他の人々が彼の代わりにその主張を公に行ったのはか後になって、ようやく彼はこの本の序文にそのことに簡潔に言及したのである」と述べた。

以上が本節のこれまでのまとめである。ロビンソンが「例外」として、書名こそ明記されていないもののKalecki (1939a) の1つだけを挙げたのは、これまで確認してきたことから、形式的には事実誤認であるが、これはどう考えたらいいのであろうか。

ロビンソンが読めないポーランド語で書かれたKalecki (1939b) は措くとして、確かにカレッキはKalecki (1942) 及びKalecki (1943) において先行性の主張を強めていた。しかしながら、状況証拠に基づく推測に過ぎないが、ロビ

ンソンもその一人である第三者からの再評価の流れを受けて、Kalecki (1954) 以降は自らの口からは明示的には先行性を主張しない方針に転じていたことをロビンソンは承知していたのであろう。本来はケインズの生前にカレッキの先行性の問題を持ち出すはずであったのにその約束を守れなかったとの負い目もあったであろう。そもそもKalecki (1937a) 以降、カレッキが先行性の主張を封印したのも、そこまでの意図はなかったにせよ、元はと言えばケインズに対する攻撃的表現を和らげるようにとのロビンソンによる指摘がきっかけであった⁶⁸。Robinson (1952)、Robinson (1964)、そしてRobinson (1966) は、ロビンソンによる遅ればせながらの償いであった。状況証拠に基づく推測に過ぎないが、そのように考えれば、Robinson (1971) における上記の表現は、むしろ必然とも言えよう。

IV. おわりに

本稿は、山本 (2021) の続編として、Kalecki (1937a) からKalecki (1938b) にかけてケインズに対する先行性の主張を封印していたカレッキが、なぜKalecki (1939a) 以降その封印を解いたのかを考察したものである。その結果は第II節及び第III節のそれぞれの末尾の小括においてまとめられているところであるが、さらに一言でまとめると、就職活動でケインズの世話になったからこそカレッキは封印を解くとの方針転換を行い、そしてロビンソンらが先行性の主張を代わりにしてくれるようになったからこそ、自らの過去の業績の日付は明記しつつも、ケインズの名前を引き合いに出して明示的に先行性の主張を行うことはしないとの方針再転換を行い、そして死の直前、結果的に死後に出版されることとなる論文集において一転して最も強い表現で先行性の主張を行うとの方針再々転換を行った、ということになる。これと関連して、ロビンソンは、自らの言動がきっかけとなってカレッキが先行性の主張を封印したこと、及び先行性の問題をケインズの前に持ち出すと約束したにもかかわらず果たし得なかったことに責任を感じ、ケインズの死後、カレッキに代わって先行性の主張を行う任務を引き受けることとなったのであった。なお、便宜のため、三部作を通じての「表2：カレッキの生涯及び先行性の問題をめぐる略年表」を本稿末尾にまとめておいた。

上記の結論は、状況証拠に基づく推測に過ぎない。しかしながら、結論そのものの当否はともかくとして、先行性

⁶⁷ ただし、英語文献であるKalecki (1935b) によってカレッキの先行性は証明し得るし、事実、クラインはKalecki (1935b) のみを根拠として1951年にカレッキの先行性を主張していた。

⁶⁸ 状況証拠に基づく推測に過ぎないが、詳しくは山本 (2021) を参照のこと。

に関するカレツキ自身及び第三者による諸文献を、断片的な記述も含め、管見の限り網羅的に時系列に沿って整理しえたことは、今後の議論の材料を提供するものとしてそれなりの意義を有するものではないかと自負するものである⁶⁹。

また、「先行性の主張」と「抗議の辞職」を導きの糸としてカレツキの生涯を振り返ることともなったが、主に Toporowski (2013) 及び Toporowski (2018) に依拠しつつ、山本 (2009) 等における記述の誤りをこの場を借りて訂正

するとともに、その元となった CWMK 等における問題点を指摘し、さらには Toporowski (2013) 及び Toporowski (2018) における問題点も指摘しえたことは、いささか重箱の隅をつつき過ぎたきらいはあるものの、カレツキ研究の土台固めにいささかでも役立てば幸いである⁷⁰。

もちろんカレツキは、何もケインズに対する先行性の主張にのみ生涯を費やしたわけではない。それ以外の部分におけるカレツキの理論の発展の検討については今後の課題としたい。

表2：カレツキの生涯及び先行性の問題をめぐる略年表

年月日	カレツキの動き	第三者及び社会の動き
1899.6.22	ポーランド王国（ロシア帝国と同君連合）のウッチに生まれる。	
1914.7.28		第一次世界大戦開始。
1917	ワルシャワ工科大学に入学。	
1918.11.11		第一次世界大戦終結（ポーランド独立記念日）。
1919	徴兵により学業中断。	
1920.2.14	ワルシャワ大学哲学部で数学の学修を始める。	
1921.2	グダンスク工科大学に移る。	
1925	家計を助けるために大学を中退。 以後、様々な仕事で生計。	
1929.12.1	景気循環・物価研究所に就職。	
1930.6.18	アデラ・シュテルンフェルトと結婚。	
【先行する研究成果】		
1933.7	『景気循環理論』（1933a）（ポーランド語）	
1933.9.30～10.2	計量経済学会ライデン大会に参加し、10月2日、「高等数学を用いて構築された循環的運動の理論」を報告。	
1935.3～4	フランス語論文（1935a）	
1935.6	エコノメトリカ論文（1935b）	
1935.10.3		ハロッド、ロバートソン宛の手紙で Kalecki (1935b) について「カレツキは、私がこれまで感じてきた何かを言おうとしているのではないかと思います。確かめてみなければならないでしょう。それにしても何という論文でしょう！」。
1936.1	スウェーデンのストックホルムに向けて出発。	
1936.2		ケインズ、『一般理論』（Keynes (1936)）
1936.2.6	ロックフェラー財団助成期間開始（～1937.2.5）。	
1936.2～3?	ケインズ『一般理論』を読む。	
1936.4.13	イギリスのロンドン到着。	
【先行性の主張】		
1936.4～7?	Kaldor (1989) によると、「ロビンスのセミナーにおける議論では、カレツキが抱えている命題に対して他の誰かがそれはケインズの見解だと言うといったことがよく見られたが、その時カレツキは、それらの考えはずいぶん前から既に抱いていたと答えたものであった」。	

⁶⁹ 実際、「この文献のこの記述とこの文献のこの記述とは同一の出来事を対象としたものであったか」「この出来事とこの出来事の間はこの出来事があったのか」などと、筆者にとっていくつもの発見があった。

⁷⁰ なお、CWMK 編集時の内幕を批判的に回顧したものとして Osiatyński (1999) を参照のこと。

年月日	カレツキの動き	第三者及び社会の動き
1936~1937?	Feiwel (1970)によると、「G・L・S・シャックル教授が最近私に語ったところによると、彼はその当時ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスでカレツキと出会い、シャックル教授が「不等価交換」と見なすことが生じた。シャックルはカレツキが彼の英語を完全にするのを助けることを引き受け、逆に後者は前者に「ケインズ経済学」を説明したのだった」。	
1936~1937	Feiwel (1975)によると、「ラーナーは……1936-37年にロンドンでカレツキを頻繁に見かけたにもかかわらず、カレツキは公表についての彼の先行性を決して彼に語らなかったと語った」。	
1936秋	『一般理論』書評 (1936a) (ポーランド語) で「投資が全体の生産量を決定するとの命題はケインズと同様の方法で……証明されていた」、「資本の需要と供給に関する類似した考えは……提出されていた」、及び「私は、生産が貨幣賃金の変動から独立していることもまた……示していた」として、それぞれKalecki (1933a)に言及。	
1936.9?	ロビンソンにKalecki (1935b)と、Kalecki (1937a)の草稿を見せる。 Kalecki (1937a)の草稿ではKalecki (1936a)と同様に先行性を主張 (山本説)。	
1936.9.16		ロビンソン、カレツキ宛の手紙で「あなたの『エコノメトリカ論文』を読んで私は恥ずかしくなります」とする一方、「あなたが論文 (山本注: Kalecki (1937a)の草稿)の最初でケインズの体系に攻撃を仕掛けていると示唆しておられることを残念に思います」。 ロビンソン、カーン宛の手紙で「『一般理論』の多くに先行しているとの彼の要求は1933年に執筆された『エコノメトリカ』の論文によって実証されます」。
【先行性の主張の封印】		
1936.9.25~29	計量経済学会オックスフォード大会に参加。	フリッシュ、「労働供給に何ら制約がない場合ですら恒常的失業が生じる可能性は、ケインズ氏が最近の業績で注意を喚起したが、最近10年間にアモローゾ、ヴィンチ、ルース、フリッシュ、カレツキ及びティンバーゲンによってマクロ動学研究にもたらされてきたことを指摘した」(Phelps Brown (1937))。
1936.10.19	ケインズとポリティカル・エコノミー・クラブの会合で初めて会う。	
1936.11.22	景気循環・物価研究所からの辞職を表明。	
1937.2.4~4.4	ケインズとの間でKalecki (1937b)掲載をめぐって往復書簡。 先行性の主張についての言及一切なし。	
1937.2	「景気循環の理論」(1937a) 先行性の主張なし。	
1937.2.6	ロックフェラー財団助成期間5か月延長開始 (~1937.7.5)。	
1937.5.7		ロビンソン、ハロッド宛の手紙で「R・E・Sのカレツキは気に入りましたか?」。
1937.5.16		ケインズ、心臓発作。
1937.7.6	ロックフェラー財団助成期間6か月再延長開始 (~1938.1.5)。	
1937.8		ロビンソン、『雇用理論入門』(Robinson (1937))序文でKalecki (1937a)を評価。
1937.9	「商品税、所得税、および資本税の理論」(1937b)で「ケインズ氏の理論は、我々が課税問題を探究するにあたり新しい基礎を提供している」。	
1937.11.19	ロックフェラー財団記録によると、この日までにカレツキのケンブリッジでの研究職内定。	
1938.1.1	ケンブリッジ大学から研究成果をまとめる研究資金 (~1938.6.30)。	

年月日	カレツキの動き	第三者及び社会の動き
1938.1.5	ロックフェラー財団助成期間最終日。	
1938.1.30		ケインズ、カーン宛の手紙で「私がカレツキのために何かしてやれる機会があるのであれば、そうします」。
1938.2.11		ケインズの主治医、通常の活動へ徐々に復帰することを認める。
1938.3	「ブルム実験の教訓」(1938a)で「我々の研究は、……ケインズ理論の経験的実証とみなされよう」。	
1938.4	「国民所得の分配の決定要因」(1938b)で「賃金に関するケインズ理論」。	
1938.5.22		ケインズ、ロバートソン宛の手紙で国立経済社会研究所のケンブリッジでの研究プロジェクトに関して「人事については、……チームについて私の考えでは、チャン [パーナウン]、オースティン [・ロビンソン]、デニソン、カレツキ及びストーンならよいチームになるだろう」。
【先行性の主張の封印を解く】		
1938.6	『経済変動理論論文集』序文執筆。	
1938.6.30	ケンブリッジ大学からの研究資金最終日。	
1938.10	国立経済社会研究所ケンブリッジ研究計画に就職。任期は1940.9.30まで。	
1938.11.23		ケインズ、カレツキに『一般理論』ポーランド語訳を許可。
1938末～1939.1?	ロビンソンとカーンがカレツキの先行性を持ち出してケインズに序文を依頼するはずであったが結局なされず、先行性については明言しないまま、読めば分かってもらえると考えて校正刷を自ら送りつける(山本説)。	
1939.1.7		ケインズ、カレツキ宛の手紙でKalecki (1939a)の校正刷の感想、誤植の指摘(出版には反映されず)。
1939.1.11		ロビンソン、カーン宛の手紙で「メイナードがカレツキの本を気に入ってうれしく思います。先行性についてのデリケートな問題はいったいどうなったのでしょうか?」。
1939.1.12		ケインズ、ロビンソン宛の手紙でKalecki (1939a)の校正刷の感想(日付の推定に矛盾?)。
1939	『経済変動理論論文集』(1939a)第3章で「私は既に……賃金の問題をこのような方法で取り扱っていた」としてKalecki (1935a)に、第6章で「その中の本質的な考えは……既に展開されていた」としてKalecki (1935a)及びKalecki (1935b)に、それぞれ言及。	
1939.7.13以降?	『貨幣賃金と実質賃金』(1939b)(ポーランド語)の序論で「賃金についてのケインズの理論、及び私自身がポーランド……で公表した理論」としてKeynes (1936)及びKalecki (1933a)に言及。	
1939		シュンペーター、『景気循環論』(Schumpeter (1939))でカレツキの景気循環理論について「この理論はくりかえし発表されてきた。最初の説明はポーランド語のものであり、従って著者にはいられていない」。
1939		ランゲ、ポーランド語の百科事典で「M・カレツキはケンブリッジで展開されたものと類似した雇用理論を完全に独立に創り出し、その基礎の上に景気循環の理論を構築した」。
1939.5		ケインズ、カーン宛の手紙でカレツキへの不満。
1939.6.9	カーン宛の手紙で「昨日あなたが私に言われたことを慎重に検討した結果、私はケンブリッジに翌年も留まることは出来ないとの最終的な結論に達しました」。	
1939		1945年3月15日のカレツキからスラッフア宛の手紙によると、「あなたの説得と取り計らいがなかったら、私は1939年にポーランドを立ち去っていて、今日生きていることはなかったでしょう」。
1939.9.1		第二次世界大戦開始。

年月日	カレツキの動き	第三者及び社会の動き
1940.2.19	オックスフォード大学統計研究所に移籍。	
1941.2.4~3.18		ケインズ, Kalecki (1941)掲載をめぐって, ロビンソン及びカルドアとの間で往復書簡。
1941.4		ランゲ, Kalecki (1939a)の書評 (Lange (1941)) で先行性を明言することなく, 第6章の元となったKalecki (1937a) について, Kalecki (1935a) 及び Kalecki (1935b)を引き継ぐものであり, 「最初の所説はポーランド語で1933年に公表された」。
1942.1.2~28	ケインズとの間でKalecki (1942)掲載をめぐって往復書簡。 先行性の主張についての言及お互いに一切なし。	
1942.6~9	「利潤の理論」(1942)で「ここに提出された利潤の理論は, ケインズ氏の貯蓄と投資の理論と密接な関係にある。これは, しかしながら, ……ケインズ氏と独立に展開されていた」としてKalecki (1935a)及びKalecki (1935b)に言及。	
1943	『経済動学研究』(1943)で「ここに提出された利潤の理論は, ケインズ氏の貯蓄と投資の理論と密接な関係にある。これは, しかしながら, ……ケインズ氏と独立に展開されていた」としてKalecki (1935a)及びKalecki (1935b)に言及。	
1944		ズヴェイク, Zweig (1944)でKalecki (1933a)について, Kalecki (1935a), Kalecki (1935b)及びKalecki (1939a)に触れつつ「彼の理論はケインズの『雇用的一般理論』に極めて近づいた」。
1945.2	オックスフォード大学統計研究所に辞表を提出, 3月15日付で受理。	
1945	モントリオールの国際労働機関 (ILO) に移る。	
1945.6.28		ポーランドに挙国一致政府成立。
1946.4.21		ケインズ, 死亡。
1946.7or8	ポーランドに一時帰国。	
1946.12.16	ILOを辞職。	
1946.12.30	ニューヨークの国際連合事務局に就職。	
1947.3		オースティン, ケインズ追悼論文 (Robinson, E. A. G. (1947)) で「ミハウ・カレツキが独立に同じゴールに近づいていたのである」。
1951.10		クライン, ハロッド『ケインズ伝』の書評 (Klein (1951)) でKalecki (1935b) について「ケインズのシステムにおける重要なものを全て含んだシステムを実際に創り上げた」。
1952		ロビンソン, Robinson (1952)で「カレツキ氏がケインズと独立に一般理論を発見したことは, 科学の同時発見の古典的な具体例であった」。
【先行性の主張を第三者に任せる】		
1954	『経済動学の理論』(1954)で「ここに与えられた利潤の理論は, ……既に展開されていた」としてKalecki (1935a)及びKalecki (1935b)に言及。	
1954.10.1	国際連合事務局を1955年1月1日をもって辞職すると の辞表を提出。	
1955.2.17	T・C・チャン宛の手紙でケンブリッジで行った講演について「彼らは紹介の際にケインズ以前の私の一般理論の発見について必ず強調してくれた」。	ドップから聞いた話としてフェイウェル, 「ケンブリッジでの戦後の講演の一つの間, カレツキはギルポーによって紹介されたが, ギルポーは, 実のところカレツキは一般理論の主要なアイディアに先行しており, それゆえそれはカレツキ革命と呼ばれてもよかったかも知れないと認めた」(この時期の講演とするのは山本説)。
1955.2	ポーランドに帰国。 以後, 社会主義計画経済の実践に関する多くの公職に就く。	
1956.6.28	中央資格審査委員会より経済学教授の称号を授与。	

年月日	カレツキの動き	第三者及び社会の動き
1958.2~3	計画審議会が派遣する視察団の一員としてイギリスに2週間滞在。	『オブザーバー』紙同年3月2日、「彼が30年代にケンブリッジに到着したとき、……彼のアイディアの多くが革命的な本『雇用・利子および貨幣の一般理論』においてケインズによってちょうど到達されていたことを発見して彼は打ち砕かれた。彼は、彼自身の努力について、これ以上何も語るまいと決心した」。
1962	『景気循環理論研究1933-1939』（1962）（ポーランド語）	ルベス、「カレツキにかつて、なぜ彼はブルム実験に関する彼の論文を、彼がポーランドで出版した資本主義経済に関する論文集の中にも含めなかったのかと尋ねた。彼の答えは次のようなものであった。「ほら、その論文で私は、私の分析はケインズの理論に基づいていると述べていますが、実際のところ、私は私自身の理論を応用していたのですよ」」（López and Assous (2010)）。
1963.12.31	計画委員会の一職から退く辞表を提出。	
1964		クライン、Klein (1964a)で「カレツキーの景気循環のモデルは、事実、単純モデルの本質的な成分をすべて展開していたし、そのうえそれは操作において動学的であった。カレツキーの『エコノメトリカ』誌上の数学的論文は、ケインズの仰々しさにくらべてあまり注意を引きつけなかったが、しかし結局のところ、理論家は問題性を見抜いて、『一般理論』に先だつカレツキーのモデルに、全幅的に当然の敬意を払うことであろう」。
1964		カレツキの65歳の誕生日を記念する論文集（Polish Scientific Publication (ed.) (1964)） Kowalik (1964), Robinson, E. A. G. (1947)及びKlein (1951)を紹介。 Klein (1964b), 「カレツキーのモデルは、……ケインズのシステムの全ての本質的な成分をいかに実際には前もって示しているかは、しばしば適切に評価されていない」。 Robinson (1964), 「公表の先行性に関するミハウ・カレツキーの主張は論争の余地がない」とする一方、「ミハウ・カレツキーが最初に認めたように、西側のアカデミックな経済学における「ケインズ革命」は、そのように呼ばれるのが正しい」。
1965.6	メキシコで開催されたラテンアメリカ経済学部会議に参加、ロビンソンと再会。	ロビンソン、6月9日のカーン宛の手紙で「カレツキはこれまでになく狂暴に現れました。彼は明らかに記念論文集の私の一節が気に障っており、それで私はしばらくの間彼の本を褒めることにします」。
1966	『景気循環理論研究1933-1939』（1966）(Kalecki (1962)の英訳)でKalecki (1939b)の収録にあたり、Kalecki (1962)とは異なり、序論を削除。 カレツキ自身の序文には、自己の理論が1933年にまで遡り得るとの指摘はあっても、ケインズの名前は一切登場せず（Kalecki (1962)においても同様であったかは未確認）。	表紙カバー折り返し部分にRobinson (1964)を再利用（「『ケインズ革命』は、そのように呼ばれるのが正しい」のくだりは含まれず）。 ロビンソン、序論（Robinson (1966)）で「本巻の英語での出版は、科学的発見の偉大な偶然の一致の最も著しいものの一つの証拠を提供する」。
1966		クライン、『ケインズ革命』第2版（Klein (1966)）で初版（1947）の「事実において、ケインズ体系におけるあらゆる要素は、なにかのおりに経済学の文献中のどこかで論ぜられていた。ところが、いまだかつて誰1人として、(1)消費（貯蓄）性向、(2)資本の限界効率、および(3)流動性選好にもとづき、完結かつ決定的なモデルを1人で造りあげた理論家はいなかった」に対し、「これは、カレツキーの先行する完結したモデルを考慮に入れるよう修正されなければならない」との注釈を追加。
1968.10.8	計画統計中央学校を定年の1年前の日付である同年9月30日から離れるとの辞表を提出。	

年月日	カレツキの動き	第三者及び社会の動き
【最も強い表現の先行性の主張】		
1970.4.17	心臓発作。 翌日死亡。	
1971	『資本主義経済動学論文選集1933-1970』（1971）の序文で「第1部は、ケインズの『一般理論』が現れる前の1933年、1934年、そして1935年にポーランド語で公表され、そしてその本質を含んでいると私が信じる3本の論文が含まれている」。Kalecki (1937b)の収録にあたり「ケインズ氏の理論」を含む段落を削除。	ロビンソン、Kalecki (1971)の書評 (Robinson (1971))で「彼は公表の先行性に公に言及したことは決してなかった（例外として彼の最初の英語の本の1つの脚注があるが、それは既に事情に通じた読者でなければ意味をなさないものであった）。彼の死の直前に至って初めて、その他の人々が彼の代わりにその主張を公に行ったのはるか後になって、ようやく彼はこの本の序文にそのことに簡潔に言及したのである」。

参考文献一覧

- Dzieła, przypisy i redakcja Jerzy Osiatyński, Michał Kalecki Dzieła*, 6 tomy, Warszawa: Państwowe Wydawnictwo Ekonomiczne, 1979-1988.
- CWMK, edited by Jerzy Osiatyński, *Collected Works of Michał Kalecki*, 7 vols., Oxford: Clarendon Press, 1990-1997.
- Bhattacharjea, Aditya and Raghunathan, N. (1988) "Keynes, Kalecki and the Question of Priority", *Economic and Political Weekly*, 23 (27), July 2, 1988, pp. 1383-1393.
- Chapple, Simon (1996) "Kalecki and Keynes", in John E. King (ed.) *An Alternative Macroeconomic Theory: The Kaleckian Model and Post-Keynesian Economics*, Boston: Kluwer Academic Publishers, 1996, pp. 35-54.
- Dell, Sidney (1977) "Kalecki at the United Nations, 1946-54", *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 31-45.
- Dobb, Maurice (1939) "An Economist from Poland", review of *Essays in the Theory of Economic Fluctuations*, by Michał Kalecki, *Daily Worker*, March 22, 1939, p. 4.
- Dostaler, Gilles (2007) *Keynes and his Battlers*, Edward Elgar, 2007. (ジル・ドスタレール, 鍋島直樹・小峯敦 (監訳), 『ケインズの闘い——哲学・政治・経済学・芸術』, 藤原書店, 2008年9月30日.)
- Feiwel, George R. (1970) "The Economics and Life of Michał Kalecki (1899-1970)", *Economia Internazionale*, 23 (4), Novembre 1970, pp. 241-277.
- (1975) *The Intellectual Capital of Michał Kalecki: A Study in Economic Theory and Policy*, Knoxville: The University of Tennessee Press, 1975.
- (1989) "The Legacies of Kalecki and Keynes", in Sebastiani (ed.) (1989), pp. 45-80.
- Johnson, Harry G. (1977) "The Shadow of Keynes", *Minerva: A Review of Science, Learning and Policy*, 15 (2), Summer 1977, pp. 201-213. Reprinted in Johnson and Johnson (1978), pp. 151-166. (H・G・ジョンソン, 『現代経済』編集室 (訳), 『ケインズの影』, 『季刊現代経済』, 32, 1978年9月7日, 162-177頁.)
- Johnson, Elizabeth S. and Johnson, Harry G. (1978) *The Shadow of Keynes: Understanding Keynes, Cambridge and Keynesian Economics*, Chicago: The University of Chicago Press, 1978. (エリザベス・S・ジョンソン, ハリー・G・ジョンソン (著), 中内恒夫 (訳), 『ケインズの影 ケンブリッジの世界と経済学』, 日本経済新聞社, 1982年3月19日.)
- Kaldor, Nicholas (1989) "Personal Recollections on Michał Kalecki", in Sebastiani (ed.) (1989), pp. 3-9, revised by F. Targetti and A. P. Thirlwall.
- Kalecki, Michał (1933a) *Próba teorii koniunktury*, Warsaw: Instytut Badania Koniunktur Gospodarczych i Cen, 1933. Reprinted in *Dzieła*, 1, s. 95-157. Translated into English as *Essay on the Business Cycle Theory*, in CWMK, I, pp. 65-108.
- (1933b) "O handlu zagranicznym i 'eksportcie wewnętrznym'", *Ekonomista*, (3), 1933, pp. 27-35. Reprinted in Kalecki (1962); and in *Dzieła*, 1, s. 199-209. Translated into English by Ada Kalecka as "On Foreign Trade and 'Domestic Exports'", in Kalecki (1966), pp. 16-25; as "On Foreign Trade and 'Domestic Exports'", in Kalecki (1971), pp. 15-25; and as "On Foreign Trade and 'Domestic Exports'", in CWMK, I, pp. 165-173. (「外国貿易と「国内輸出」について」, Kalecki (1971), 邦訳, 16-25頁.)
- (1935a) "Essai d'une théorie du mouvement cyclique des affaires", *Revue d'économie politique*, 49 (2), Mars-Arville 1935, pp. 285-305.
- (1935b) "A Macrodynamics Theory of Business Cycles", *Econometrica*, 3 (3), June 1935, pp. 327-344. Reprinted in CWMK, I, pp. 120-138.
- (1936a) "Parę uwag o teorii Keynesa", *Ekonomista*, (3), 1936, pp. 18-26. Reprinted in *Dzieła*, 1, s. 263-273. Translated into English as "Some Remarks on Keynes's Theory", in CWMK, I, pp. 223-232.
- (1936b) "Comments on the Macrodynamics Theory of Business Cycles", *Econometrica*, 4 (4), October 1936, pp. 356-

360. Reprinted in *CWMK*, I, pp. 139-143.
- (1937a) “A Theory of the Business Cycle”, *The Review of Economic Studies*, 4 (2), February 1937, pp. 77-97. Reprinted in *CWMK*, I, pp. 529-557. Reprinted with important alterations in Kalecki (1939a), pp. 116-149.
- (1937b) “A Theory of Commodity, Income, and Capital Taxation”, *The Economic Journal*, 47 (187), September 1937, pp. 444-450. Reprinted as “A Theory of Commodity, Income and Capital Taxation”, in Kalecki (1971), pp. 35-42; and in *CWMK*, I, pp. 319-325. (「商品税, 所得税および資本税の理論」, Kalecki (1971), 邦訳, 34-41頁.)
- (1938a) “The Lesson of the Blum Experiment”, *The Economic Journal*, 48 (189), March 1938, pp. 26-41. Reprinted in *CWMK*, I, pp. 326-341. (ミハウ・カレッキ (著), 振津純雄 (訳), 「ブルムの実験の教訓」, 『大阪経済法科大学経済学論集』, 16 (3-4), 1993年3月31日, 179-197頁.)
- (1938b) “The Determinants of Distribution of the National Income”, *Econometrica*, 6 (2), April 1938, pp. 97-112. Reprinted in *CWMK*, II, pp. 3-20. Reprinted with important alterations as “The Distribution of the National Income”, in Kalecki (1939a), pp. 13-41.
- (1939a) *Essays in the Theory of Economic Fluctuations*, London: George Allen and Unwin, 1939. Reprinted in *CWMK*, I, pp. 233-318. (エム・カレッキ, 増田操 (訳), 『ケインズ雇傭と賃銀理論の研究』, 戦争文化研究所, 1944年5月15日.)
- (1939b) *Plac nominalne i realne*, Warsaw: Instytut Gospodarstwa Społecznego, 1939. Reprinted in Kalecki (1962), pp. 61-104; and in *Dziela*, 2, s. 40-72, 560-562. Translated into English by Ada Kalecka without introduction and preface as “Money and Real Wages”, in Kalecki (1966), pp. 40-71; and with introduction and preface in *CWMK*, II, pp. 21-50, 517, 519-521.
- (1941) “A Theorem on Technical Progress”, *The Review of Economic Studies*, 8 (3), June 1941, pp. 178-184. Reprinted in *CWMK*, II, pp. 107-116.
- (1942) “A Theory of Profits”, *The Economic Journal*, 52 (206-207), June-September 1942, pp. 258-267. Reprinted with important alterations in Kalecki (1943), pp. 47-58.
- (1943) *Studies in Economic Dynamics*, London: George Allen and Unwin, 1943. Reprinted in *CWMK*, II, pp. 117-190.
- (1944) “The Work of Erwin Rothbarth”, *The Review of Economic Studies*, 12 (2), September 1944, pp. 121-122. Reprinted in *CWMK*, VII, pp. 322-324.
- (1954) *Theory of Economic Dynamics: An Essay on Cyclical and Long-Run Changes in Capitalist Economy*, London: George Allen and Unwin, February 1954. Reprinted in *CWMK*, II, pp. 205-348. (M.カレッキ, 宮崎義一・伊東光晴 (共訳), 『経済変動の理論 資本主義経済における循環的及び長期的変動の研究』, 新評論, 1958年7月25日.)
- (1962) *Prace z teorii koniunktury 1933-1939*, Warsaw: Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1962. Translated into English with an introduction by Joan Robinson as Kalecki (1966).
- (1966) *Studies in the Theory of Business Cycles 1933-1939*, Oxford: Basil Blackwell, 1966. Translated from Kalecki (1962) with an introduction by Joan Robinson.
- (1971) *Selected Essays on the Dynamics of the Capitalist Economy 1933-1970*, London⁷¹: Cambridge University Press, 1971. (M.カレッキ, 浅田統一郎・間宮陽介 (共訳), 『資本主義経済の動態理論』(ポスト・ケインジアン叢書6), 日本経済評論社, 1984年12月30日.)
- Keynes, John Maynard (1936) *The General Theory of Employment, Interest and Money*, London: Macmillan, 1936. Reprinted in Royal Economic Society (1973). (塩野谷祐一 (訳), 『雇用・利子および貨幣の一般理論』(ケインズ全集第7巻), 東洋経済新報社, 1983年12月8日.)
- (1939) “Relative Movements of Real Wages and Output”, *The Economic Journal*, 49 (193), March 1939, pp. 34-51. Reprinted in Royal Economic Society (1973), pp. 394-412. (塩野谷祐一 (訳), 「実質賃金と産出量の相対的変動」, Royal Economic Society (1973), 邦訳, 396-415頁.)
- Klein, L. R. (1947) *The Keynesian Revolution*, New York: The Macmillan Company, 1947. (L. R. クライン, 篠原三代平・宮沢健一 (訳), 『ケインズ革命 (新版)』, 有斐閣, 1965年10月30日.)
- (1951) “The Life of John Maynard Keynes”, review of *The Life of John Maynard Keynes*, by R. F. Harrod, *The Journal of Political Economy*, 59 (5), October 1951, pp. 443-451.
- (1964a) “The Keynesian Revolution Revisited”, 『季刊理論経済学』, 15 (1), 1964年11月30日, 1-24頁. Reprinted in Klein (1966), pp. 191-226. (「ケインズ革命再考」, L. R. クライン, 篠原三代平・宮沢健一 (訳), 『ケインズ革命 (新版)』, 有斐閣, 1965年10月30日, 231-265頁.)
- (1964b) “The Role of Econometrics in Socialist Economics”, in Polish Scientific Publishers (ed.) (1964), pp. 181-191.
- (1966) *The Keynesian Revolution SECOND EDITION*, New York: The Macmillan Company, 1966.
- Kowalik, Tadeusz (1964) “Biography of Michal Kalecki”, in Polish Scientific Publishers (ed.) (1964), pp. 1-12.
- Kuznets, Simon (1939) Review of *Essays in the Theory of Economic Fluctuations*, by Michal Kalecki, *The American Economic*

⁷¹ 山本 (2009), 205頁; (2020), 135頁; (2021), 130頁等, おそらくは筆者がこれまで執筆した全ての論考において出版地を「Cambridge」としていたが, 学生時代に入手して以来手元にあった「Reprinted 1977」の版に基づくものであり, 初版としては正しくは「London」とすべきものであった。ご指摘いただいた松本有一・元関西学院大学教授に感謝いたします。

- Review*, 29 (4), December 1939, pp. 804-806.
- Lange, Oscar Ryszard (1941) Review of *Essays in the Theory of Economic Fluctuations*, by Michal Kalecki, *The Journal of Political Economy*, 49 (2), April 1941, pp. 279-285.
- López G., Julio and Assous, Michaël (2010) *Michal Kalecki*, Houndmills, Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2010.
- Marcuzzo, Maria Cristina (2012) *Fighting Market Failure: Collected Essays in the Cambridge Tradition of Economics*, Routledge, 2012. (M. C. マルクツォ (著), 平井俊顕 (監訳), 『市場の失敗との闘い ケンブリッジの経済学の伝統に関する論文集』(ポスト・ケインジアン叢書38), 日本経済評論社, 2015年7月30日.)
- (2020) “Kalecki and Cambridge”, *Review of Political Economy*, 32 (4), 2020, pp. 500-510. Reprinted in Rochon, Czachor and Bachurewicz (eds.) (2022), pp. 14-24.
- Marcuzzo, Maria Cristina and Rosselli, Annalisa (eds.) (2005) *Economists in Cambridge: A study through their correspondence, 1907-1946*, London and New York: Routledge, 2005.
- Marcuzzo, Maria Cristina and Sardoni, Claudio (2005) “Fighting for Keynesian revolution. The correspondence between Keynes and J. Robinson”, in Marcuzzo and Rosselli (eds.) (2005), pp. 174-195.
- 松本有一 (2021) 『ピエロ・スラフファ—非主流の経済学者—』, 関西学院大学出版会, 2021年10月5日.
- Meade, J. E. (1939) Review of *Essays in the Theory of Economic Fluctuations*, by M. Kalecki, *The Economic Journal*, 49 (194), June 1939, pp. 300-305.
- Mitra, Ashok (1986) “The Stranger from Poland”, *Economic and Political Weekly*, 21 (46), November 15, 1986, pp. 1990-1991.
- 元木久 (1989) 「カレツキとケインズ革命 —『一般理論』の発見—」, 橋本昭一 (編) 『近代経済学の形成と展開』(昭和堂入門選書17), 昭和堂, 1989年5月30日, 185-228頁.
- (2009) 「カレツキとロックフェラー財団記録」, 『関西大学経済論集』, 59 (3), 2009年12月, 71-104頁.
- 緒方俊雄 (1995) 「カレツキ「商品税, 所得税および資本税の理論」とケインズ」, 『経済学論纂』, 36 (4), 1995年10月30日, 149-178頁.
- Osiatyński, Jerzy (1990) “Editorial Notes and Annexes”, to *CWMK*, I, pp. 421-594.
- (1991) “Editorial Notes and Annexes”, to *CWMK*, II, pp. 477-615.
- (1992) “Editorial Notes and Annexes”, to *CWMK*, III, pp. 255-428.
- (1993) “Editorial Notes and Annexes”, to *CWMK*, V, pp. 175-246.
- (1997a) “Editorial Notes and Annexes”, to *CWMK*, VII, pp. 479-585.
- (1997b) “On Michał Kalecki’s Work for the United Nations”, in *CWMK*, VII, pp. 552-575.
- (1997c) “Main Dates and Facts in Kalecki’s Life”, in *CWMK*, VII, pp. 586-605.
- (1997d) “Bibliography of Kalecki’s Publications 1927-1989”, in *CWMK*, VII, pp. 606-667.
- (1999) “Michal Kalecki, 1899-1970: some nostalgic memories”, *Review of Political Economy*, 11 (3), July 1999, pp. 261-266.
- (2020) “Remembering Kalecki: 22/05/1899-18/04/1970”, *Review of Political Economy*, 32 (4), 2020, pp. 492-499. Reprinted in Rochon, Czachor and Bachurewicz (eds.) (2022), pp. 6-13.
- Patinkin, Don (1982) *Anticipations of the General Theory? And Other Essays on Keynes*, Chicago: The University of Chicago Press, 1982.
- Phelps Brown, E. H. (1937) “Report of the Oxford Meeting, September 25-29, 1936”, *Econometrica*, 5 (4), October 1937, pp. 361-383.
- Polish Scientific Publishers (ed.) (1964) *Problems of Economic Dynamics and Planning: Essays in Honour of Michal Kalecki*, Warszawa: Polish Scientific Publishers, 1964.
- Robinson, E. A. G. (1947) “John Maynard Keynes 1883-1946”, *The Economic Journal*, 57 (225), March 1947, pp. 1-68. (E・A・G・ロビンソン, 「ジョン・メイナード・ケインズ 一八八三—一九四六」, ロバート・ルカッチマン (編), 中内恒夫 (訳), 『ケインズ経済学の発展—『一般理論』後の三〇年の歩み—』, 東洋経済新報社, 1967年4月25日, 17-104頁.)
- Robinson, Joan Violet (1937) *Introduction to the Theory of Employment*, London: Macmillan, 1937. (ジョーン・ロビンソン (著), 川口弘 (訳), 『ケインズ雇用理論入門』(現代経済学選書), 巖松堂出版, 1958年11月5日.)
- (1952) *The Rate of Interest and Other Essays*, London: Macmillan, 1952. (J・ロビンソン (著), 大川一司・梅村又次 (訳), 『利子率その他諸研究—ケインズ理論の一般化—』, 東洋経済新報社, 1955年5月10日.)
- (1964) “Kalecki and Keynes”, in Polish Scientific Publishers (ed.) (1964), pp. 335-341. (「カレツキとケインズ」, J・ロビンソン, 山田克巳 (訳), 『資本理論とケインズ経済学』(ポスト・ケインジアン叢書11), 日本経済評論社, 1988年11月30日, 43-52頁.)
- (1966) “Introduction”, to Kalecki (1966), pp. vii-xii.
- (1971) “Michał Kalecki”, *Cambridge Review*, 93 (2204), October 22, 1971, pp. 1-2, 4.
- Rochon, Louis-Philippe; Czachor, Marcin and Bachurewicz, Gracjan Robert (eds.) (2022) *Kalecki and Kaleckian Economics: Understanding the Economics of Michal Kalecki and His Legacy after 50 Years*, London and New York: Routledge, 2022.
- Rosselli, Annalisa (2005) “An enduring partnership. The correspondence between Kahn and J. Robinson”, in Marcuzzo and Rosselli (eds.) (2005), pp. 260-273.
- Royal Economic Society (1973) *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Volume VII, *The General Theory of*

- Employment, Investment and Money*, edited by Donald Moggridge, London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1973. (塩野谷祐一 (訳), 『雇用・利子および貨幣の一般理論』(ケインズ全集第7巻), 東洋経済新報社, 1983年12月8日.)
- (1983) *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Volume XII, *Economic Articles and Correspondence, Investment and Editorial*, edited by Donald Moggridge, London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1983.
- Sawyer, Malcolm Charles (1985) *The Economics of Michał Kalecki*, London: Macmillan, 1985. (M.C.ソーヤー, 緒方俊雄 (監訳), 『市場と計画の社会システム カレツキ経済学入門』(ポスト・ケインジアン叢書23), 日本経済評論社, 1994年9月30日.)
- Schumpeter, Joseph A. (1939) *Business Cycles: A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, 2 vols., New York and London: McGraw-Hill Book Company, 1939. (シユムペーター, 吉田昇三 (監修), 金融経済研究所 (訳), 『景気循環論—資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析—』, 全5巻, 有斐閣, 1958-1964年.)
- Sebastiani, Mario (ed.) (1989) *Kalecki's Relevance Today*, London: Macmillan, 1989.
- Tew, Braian (1999) "Kalecki's "Essays in the Theory of Economic Fluctuations"", *Review of Political Economy*, 11 (3), July 1999, pp. 273-282.
- Toporowski, Jan (2011) "Shared Ideas Amid Mutual Incomprehension: Kalecki and Cambridge", in Philip Arestis (ed.) *Microeconomics, Macroeconomics and Economic Policy: Essays in Honour of Malcolm Sawyer*, Palgrave Macmillan, 2011, pp. 170-187.
- (2013) *Michał Kalecki: An Intellectual Biography, Volume 1: Rendezvous in Cambridge 1899-1939*, Houndmills, Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2013.
- (2018) *Michał Kalecki: An Intellectual Biography, Volume 2: By Intellect Alone 1939-1970*, Palgrave Macmillan, 2018.
- Worswick, G. D. N. (1977) "Kalecki at Oxford, 1940-44", *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 39 (1), February 1977, pp. 19-29.
- 山本英司 (2009) 『カレツキの政治経済学』(奈良産業大学経済・経営研究叢書5), 千倉書房, 2009年3月18日.
- (2020) 「『一般理論』書評におけるカレツキのケインズ理解と到達点」, 『金沢星稜大学論集』, 53 (2), 2020年3月31日, 111-136頁.
- (2021) 「カレツキはケインズに対する先行性の主張をなぜ封印したのか」, 『金沢星稜大学論集』, 54 (2), 2021年3月31日, 105-131頁.
- Zweig, Ferdynand (1944) *Poland Between Two Wars: A Critical Study of Social and Economics Changes*, London: Secker & Warburg, 1944.